石名山窯跡発掘調査報告

1986

大門町教育委員会

埋蔵文化財に対する興味や関心は、近年とみに昻まりつつあります。それは遠い祖先の残した文化遺産から往時の人々の生活を正確に窺い得る手懸りであり、未知を解明するロマンを秘めておるからでありしょう。

このたび、畑地造成のため丘陵地の斜面を掘削中に偶然発見された石名山の窯跡につきましても、7・8世紀の須恵器窯跡と推定され、当時における一大須恵器生産地の姿が浮彫にされてきております。この調査を通して、往時の人々の喧噪と、たくましい息づかいが聞こえてくるではありませんか。

調査の終了に際し、直接現場で調査に当られた県埋蔵文化財センターの調査員の諸氏、適切な指導・助言を賜った調査指導委員の諸 先生、そして県文化課の各位、地元関係各位にあらためて深く謝意 を表します。

本報告書に盛られた諸成果が、地域住民の文化財の保護意識の高揚に役立つことを願い、序の言葉にかえたいと思います。

大門町教育委員会 教育長 春田 保二

- 1. 本書は、富山県射水郡大門町水戸田に所在する石名山(いしなやま)窯跡の発掘調査報告である。
- 2. 調査は、国庫及び県費の補助を受けた大門町教育委員会が、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて実施した。
- 3. 調査事務は、富山県教育委員会文化課及び富山県埋蔵文化財センターの指導を受けて、社会教育係長山内英夫、学校教育係長居田征 雄が担当し、教育次長藤沢義真が総括した。
- 4. 調査参加者は以下のとおりである。

調査担当者 富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事池野正男・同宮田進一、調査員 同主任岸本雅敏、調査補助員 岡本淳一郎

- 5. 考古地磁気の測定は富山大学理学部教援広岡公夫氏に、放射性炭素年代測定については、石川考古学研究会会員木立雅郎氏にお願い し、各氏から玉稿をいただいた。
- 6. 調査期間中及び報告書作成にあたり下記の方々から御指導、御助言をいただいた。記して謝意を表したい。(以下敬称略) 富山大学人文学部教授秋山進午・同助教授和田晴吾 (現立命館大学文学部助教授)、富山考古学会会員西井龍儀、伊藤隆三、石川県 立埋蔵文化財センター平田天秋、田嶋明人、小嶋芳孝、福島正実、北野博司
- 7. 本書の執筆・編集は、池野正男・宮田進一・北川美佐子(富山大学卒業生)が行った。なお文責は文末に記した。
- 8. 遺物実測図は原則として4分の1、遺物写真は2.5分の1である。それ以外の縮尺は、それぞれ別に記した。

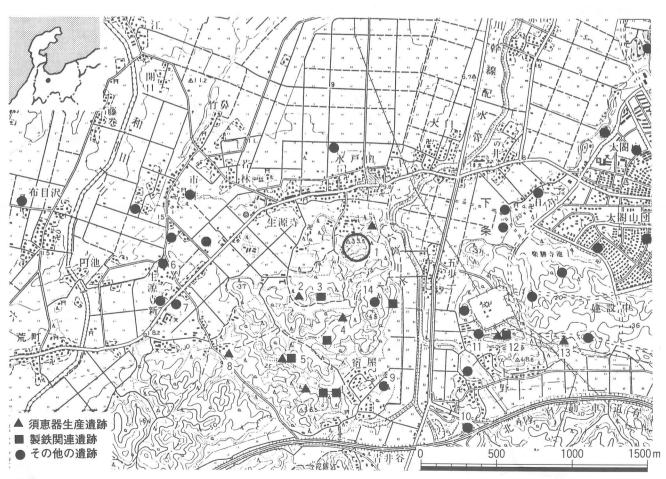
目 次

Ι	位置と周	閉辺の遺跡	1	V	調査の結果 17	
	第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	1		表 1 杯蓋・杯口径表	
П	旧南郷中	中学校所蔵の遺物	2		第16図 陶棺実測図 19	
	第2図	旧南郷中学校所蔵の遺物	2		第17図 上野遺跡第Ⅱ台地8号住居出土遺物 20	
	第3図	旧南郷中学校所蔵の遺物	3		第18図 小杉流団No.6 遺跡・	
\coprod	調査の経	圣緯	4		中山王窯跡群 A 地区出土遺物 ····· 21	
IV	発掘調	查	4		表 2 杯蓋・杯口径表 23	
	第4図	地形と区割図	4		表 3 法量表	
	第5図	遺構全体図	5		第19図 平岡窯跡採取遺物 … 26	
	第6図	2 号窯床面出土遺物	6		第20図 小杉流団No.16遺跡 2 号窯 — Ⅰ·Ⅱ	
	第7図	2号窯実測図			出土遺物	
	第8図	2 号窯・西地区穴出土遺物	7		第21図 小杉流団No.16遺跡1号窯及び	
	第9図	1 号窯実測図	9		周辺出土遺物 28	
	第10図	1号窯・遺構上面出土遺物	10	VI	. 自然科学的分析	
	第11図	2・3・4 号穴実測図	12		1 石名山 1・2 号窯の考古地磁気測定 31	
	第12図	1・2・3 号穴出土遺物	13		2 富山県大門町石名山窯跡の	
	第13図	4 · 11号穴出土遺物	14		西地区穴の ¹⁴ C年代測定 34	
	第14図	表採遺物 ·····	15		写真図版	
	第15図	表採遺物	16			

I 位置と周辺の遺跡

石名山窯跡は射水平野南部の金山丘陵西側北端に位置する。丘陵一帯は青井谷泥岩層(新第三紀上部の音川累層)から成り、北の日の宮付近には呉羽丘陵の峠茶屋層に比する日宮互層が発生している。この互層粘土は、良質の瓦の原料となっており、現在でも瓦生産が営まれている。丘陵端部は、下条川と和田川によって開析され、中央部は狭長な沖積地が樹枝状に入り込み、溺れ谷のような地形を示している。西側には和田川によって芹谷野段丘が形成され、市ノ井付近からは扇状地が広がっている。

周辺の遺跡としては、縄文時代では、中期後半の串田新遺跡、生源寺新遺跡がある。布目沢や市ノ井付近など、かって低湿地であったと思われる場所から弥生土器が発見されている。又、一帯は古墳が多く、丘陵西方には5世紀末~6世紀頃のものと思われる大塚古墳があり、付近には、今は破壊されてしまったが、「十三塚」と称される古墳群が形成されていた。他にも宿屋古墳、五歩一古墳群、山王宮古墳群などがある。当遺跡と小谷を挟んで立地する流通業務団地内遺跡群は、先土器時代から中世に至るあらゆる時代の遺跡の宝庫となっている。又、当遺跡も含めて、丘陵西側は須恵器窯が多く発見されている。生源寺窯跡、流団No.16遺跡(3基)、No.7遺跡(7基)、No.18遺跡A地区(1基)、小杉丸山遺跡(須恵器窯3・瓦陶兼業窯1)、天池窯跡(2基)などがあり、須恵器の一大生産地を成していたと思われる。南方の弥生末期・古墳時代後期の集落跡が発見された上野遺跡は、その消費地として重要な位置を占めている。これらの遺跡から、7世紀初頭に開始され、8世紀中頃まで連綿と続けられた、丘陵上における須恵器生産の流れが概観できる。当遺跡の調査もその問題点を解明する上で大きな役割を果している。(北川)



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

石名山窯跡
 小杉流団No.7 遺跡
 小杉流団No.6 遺跡
 小杉流団No.16遺跡
 小杉丸山遺跡
 大塚古墳
 上野遺跡
 上野遺跡
 南太陽山 [遺跡
 五歩一古墳群

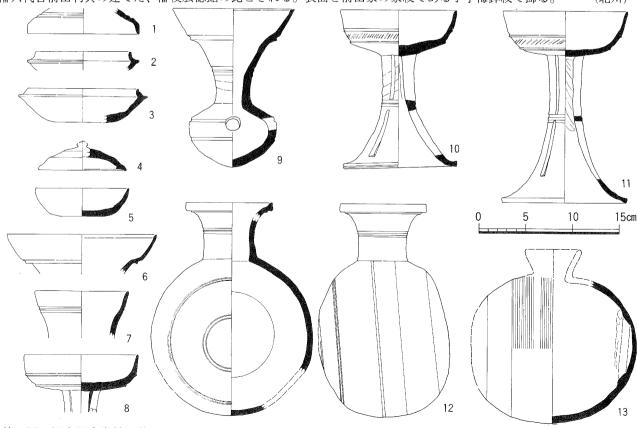
Ⅱ 旧南郷中学校所蔵の遺物

旧南郷中学校は大門町生源寺新に所在し、主に水戸田、生源寺付近一帯で採集された、縄文時代から近世に至る遺物を所蔵していた。ここでは、古墳時代から近世に至る遺物を扱う。尚、遺物は現在、大門町串田公民館が所蔵する。

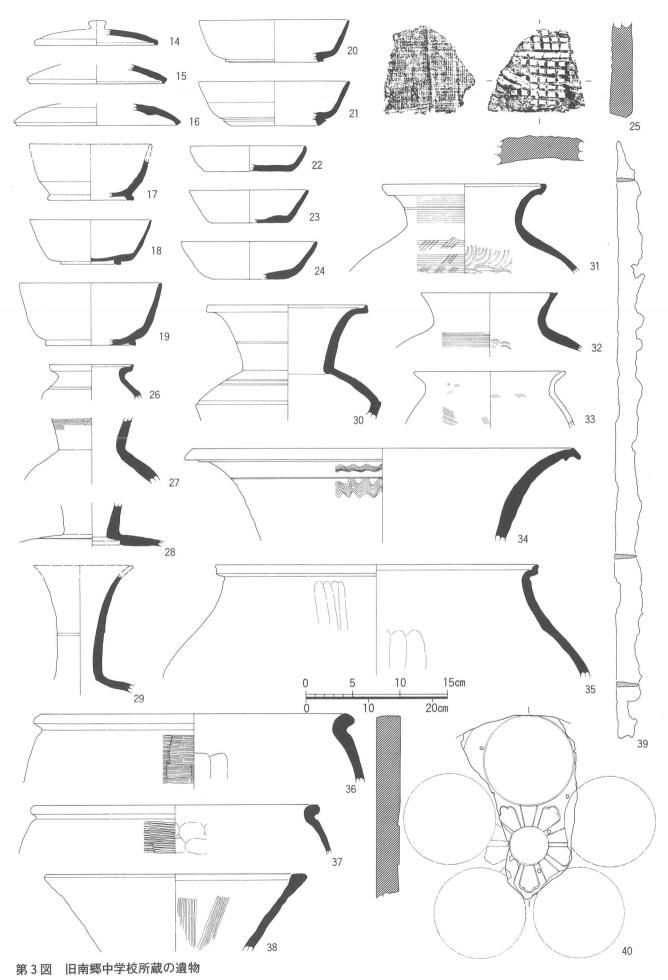
古墳時代 須恵器(第2図・3図31)杯蓋4は口径9.4cm、頂部ロクロ削り、内面に小さなかえりを有す。小型の宝珠紐が付くものと思われる。杯2・3は共に扁平な体部に水平にのびる受け部を有す。7は提瓶の口縁か。庭9は口頸部が大きく外反し、丸味のある体部に2条の沈線を施す。高杯10は杯部にヘラ先による斜線の文様帯を施す。脚部には二段三方の透しが穿たれ、内面に螺旋状のしぼり目。12は提瓶。体部はロクロナデ、一部ロクロ削り、体部片面に2条の沈線による同心円を廻らす。13は横瓶。体部はロクロ削りとカキ目調整、径5.5cmの円板で塞孔。甕31は口縁が膨らみ内側に巻き込む形態、頸部カキ目調整、体部はタタキ後、カキ目調整。土師器(第3図33)小型甕。体部外面ハケ目調整、内面ハケ目調整後、ナデる。直刀(第3図39)生源寺地内の直径15mの円墳から出土。長さ83cm。4・5は7世紀中葉まで下るが、他は6世紀後半から7世紀初頭。

奈良・平安時代 須恵器 (第3図14~24·26~30·32·34) 杯蓋16は頂部をロクロ削リとロクロナデ調整。杯17は体部下面に削りを施した稜椀。26~30は壺。26は口径8.8cmの小型壺。短い頸部がくの字に屈曲。30は受口状口縁の広口壺。 甕34は口縁端部が上下に肥厚し、頸部に2条の櫛描波状文を廻らす。平瓦 (第3図25) 凹面布目痕、凸面7×(7+α) の格子叩き目。この叩き目は小杉丸山遺跡出土瓦のAi叩き目と類似し、同一叩き原体とも思われるが、焼成による収縮などもあり、断定は避けた。

中世・近世 (第3図35~38·40) 35は甕の口縁。八尾町京ヶ峰古窯焼成品。口縁たちあがりをヘラアテにより作り出し、端部をヘラで面取り。13~14世紀。36~38は珠洲焼。38は擂鉢で、口縁上面で面を取り、8本以上の櫛歯結束で卸し目を放射状に施す。14世紀後半か。40は棟端飾板の一種。富山市丸の内の婦人会館建設の際発見され、富山藩六代目前田利興の建てた、藩校広徳館の瓦とされる。表面を前田家の家紋である丁字梅鉢紋で飾る。 (北川)



第2図 旧南郷中学校所蔵の遺物



Ⅲ調査の経緯

石名山窯跡は、大門町水戸田神明堂に所在する。当地内から小杉町青井谷地内にかけての丘陵部は小杉流通業務団地(以下小杉流団と呼ぶ)造成工事に先立つ分布調査で数多くの窯跡等の遺跡が発見され、本調査が実施されている。 窯跡は、北東にのびた小丘陵の南側斜面に位置し、小杉流団とは小谷を挟んで接する。小杉流団各窯跡との直線距離はNo 7 窯跡が南西方向に約550m、No16遺跡窯跡群とは、丘陵一つ越えた南方約500mにある。

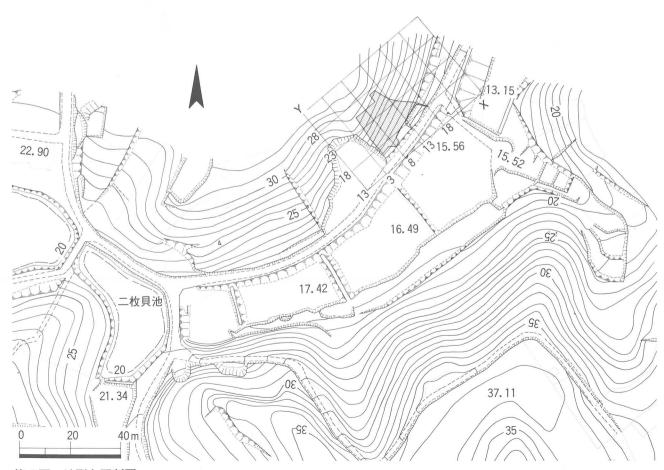
昭和59年10月に地区民から須恵器出土の連絡を受けた富山県埋蔵文化財センターは、急遽土取り施行者である清水 瓦店清水源治氏、大門町教育委員会の三者で保護措置についての打ち合わせをもつこととなった。その結果、次年度 に国庫及び県費補助を受けて本調査を実施することとなり、その間の土取りは窯跡に支障のない北側で実施すること で合意した。

本調査は、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、昭和60年4月25日から6月6日の間実施した。 調査面積は約300㎡である。

Ⅳ 発掘調査

12 号窯(第7図 図版3の1~5)

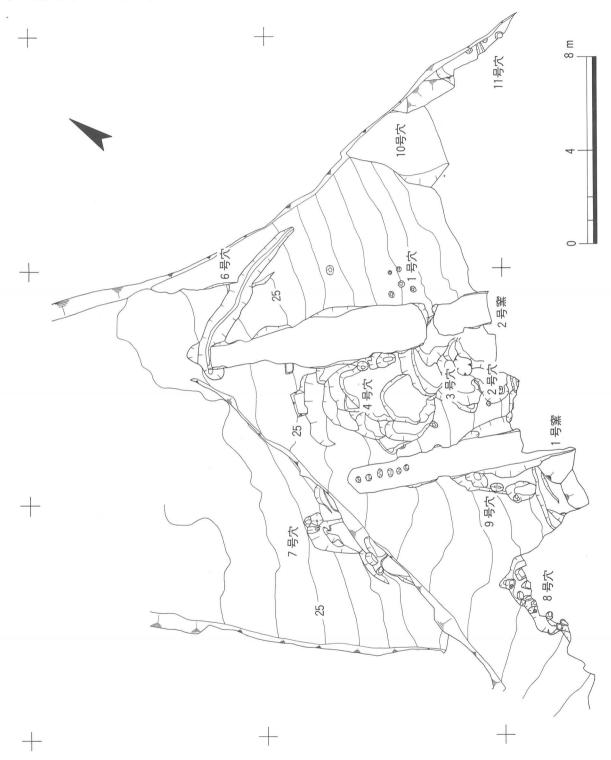
立地と窯体規模 2号窯は焚口付近で20.40 m、煙出し底面で24.50 mの標高を測り、4.1 mの比高差をもつ。窯体は等高線とほぼ直交し、主軸方向をN-41°-Wにとる。遺存状態は、前庭部及び焚口の一部を欠くが、燃焼部の天井が残存するなど総体的には良い。床面の長さは、断面図作成線上で11.7 m、煙出し上面のすり鉢状のピットを含め



第4図 地形と区割図

た総延長は12.9mを測る。

焚口と燃焼部 床幅が広がりを見せ、また、二次床面上に焼き台転用須恵器が置かれる地点までを焚口・燃焼部とすると、長さ1.6mを測る。床幅は焚口部分が最も狭く90cmで、側壁は垂直に近い角度で立ちあがる。焚口から燃焼



第5図 遺構全体図

部にかけての床面はほぼ水平に掘られた後、燃焼部方向にわずかに低くなる傾斜をもたせた黄褐色土埋土が認められる。埋土の厚さは最大で10cm程度で、不純土層を含まず窯体構築時に行なわれたものと推定される。埋土上には数cmの灰層が認められる。燃焼部から焼成部にかけての床面には1・2次床面を壊して長さ約2.7m、幅85cmの溝状の穴が掘り込まれる。覆土は、還元及び酸化窯壁まじりの埋土で、再び埋土上面に焼成面が形成される。覆土中からの出土遺物には、杯蓋、杯、高杯などの破片がある。

燃焼部の天井は一部残存(D-D'セクション図)しており、断面形状はカマボコ状を呈し、最終床面からの高さは最大で90cmを測る。また、東側側壁の還元面が垂直に切れる部分が認められる。これは、90cm程度の天井が、この部分で1.4m以上になることを意味する。類例は小杉流団No.7遺跡第3号窯跡にある。焚口の側壁還元面は、手前に徐々に低くなり、色調も黄褐色還元面となる。

燃成部 煙出しまでの長さ10.1m、床面最大幅2.3m、遺構検出面からの深さは最大で1.9mを測る。床面は弓なりにあがり、傾斜は最も急な中央部で約32度を測る。還元面は中央部から手前及び側壁際で2枚認められ、煙出し近くでは黒色化する。還元層の厚さは約1cm、酸化層の厚さは約3cmを測る。

1次床面上には拳大の河原石、焼き台転用 の須恵器が僅かに残る。この中には、河原石 2個を据えその上に甕破片を置き平坦を作る もの、杯蓋の完形品を伏せたものなどがある。

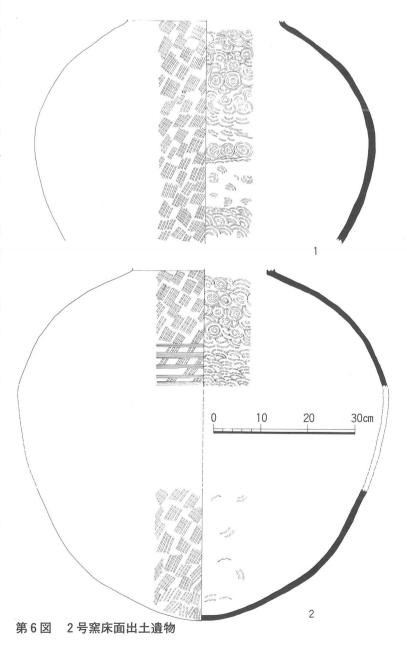
2次床面上にも拳大から人頭大の河原石と 大甕破片の焼き台のみで、両側壁に寄せ集め られた状態で出土し、河原石が出土量の3分 の2を占める。第6図1・2は焼き台に利用 された大甕の体部破片である。

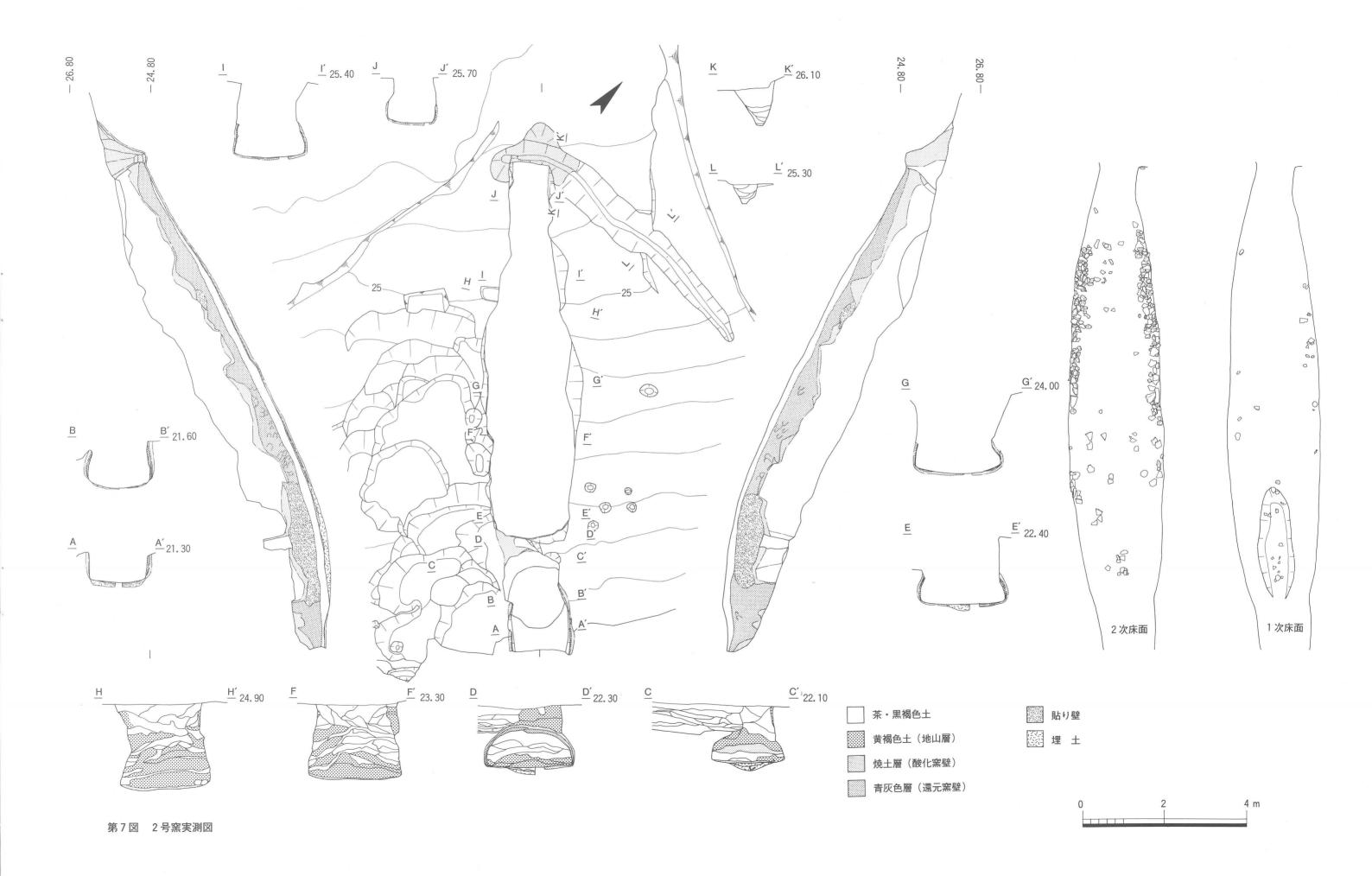
側壁は床面より最大で70cmまで残存し、幅 10cm前後の工具痕が多く認められる。貼り壁 は両壁の小範囲に認められる。

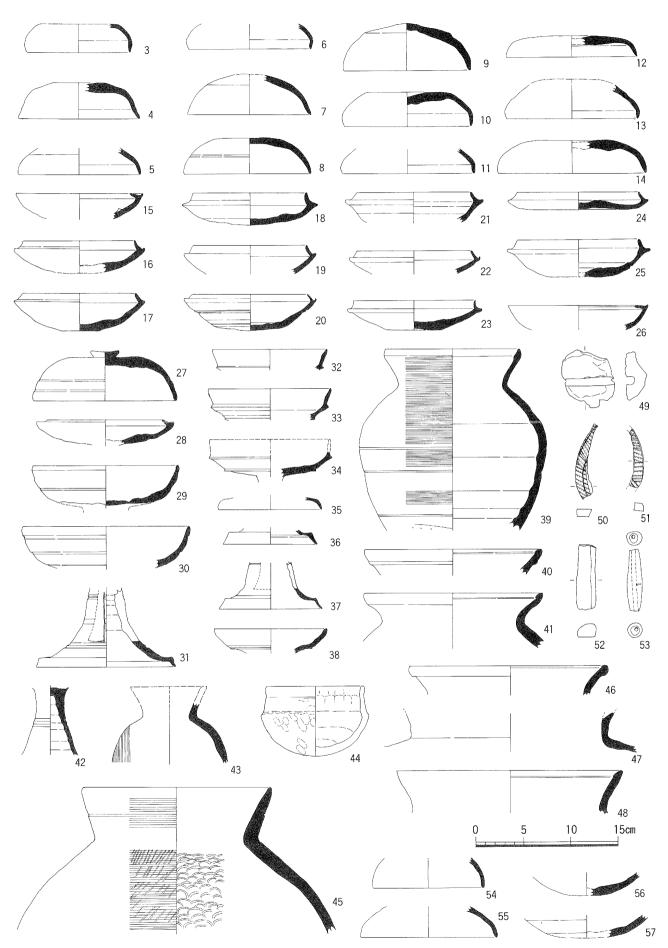
煙出しと排水溝 焼成部から登ってきた床面は、わずかに掘り窪められた排水溝に至る。煙出し及び排水溝には還元面は認められず、酸化面は排水溝の途中まで広がる。排水溝の平面形態はほぼ直線的にのび、全長7.3m、最大深1.1mを測る。断面形態は「и」字状を呈する。類例は小杉流団No.7遺跡第1・5号窯跡・同No.16遺跡第3号窯跡がある。

出土遺物 (第6・8図)

出土遺物は少なく、大部分が大甕体部破片 であるが、僅かに杯蓋、杯、有蓋高杯、無蓋高 杯、提瓶、腿、壺、甕、陶錘などの破片がある。







第8図 2号窯・西地区穴出土遺物 9・21・25・29・30・48. 1 次床面 6・8・13・16~19・24・28・31~33・35・37・39・40・46・53. 2 次床面 7・10・11・15・20・22・26・27・34・38・42・49・51. 焚口穴 3・4・12・23・36・41・43・50・52. 焚口 14. 排水溝 5・44・45・47. 覆土上面 54~57. 西地区穴

21 号窯(第9図、図版4の1~5)

立地と窯体規模 1号窯は2号窯の西側4mの位置に、並行して構築される。窯体は、焚口と焼成部の床面及び煙出し周辺が破壊されている。残存長は西側側壁際で11.1mを測る。標高は焼成部中央でわずかにふくらむ程度で直線的にのびる。主軸はN-43 $^{\circ}-W$ にとる。

燃焼部 床面の大部分を失なっている。わずかに西側側壁際の床面が残り、傾斜が3度程度と緩く、燃焼部の一部と推定される。側壁は、わずかに丸味をもって立ちあがり、貼り壁が認められる。

焼成部 床面はわずかに弓なりになりながら登り、傾斜は最大で33度を測る。還元層は1枚で厚さ2cm、酸化層は5cmを測る。中央から奥の床面上には直径28~38cmの穴が直線的にほぼ等間隔に掘り込まれている。穴の底面及び壁面も還元していることから、製品の出し入れ用の足かけ穴と推定される。

床面上からは、焼き台に転用された杯 B 蓋、杯 A 、杯 B 、甕が散乱状態で出土した。床面の最大幅は $1.4\mathrm{m}$ で、断面形態は、わずかに丸味を持つ。

側壁還元層は最も残存状態の良い部分で95cmを測り、全面貼り壁が施される。貼り壁は多い所で3枚認められる。 煙出しと排水溝 床面より約10cm掘りくぼめられた小規模の排水溝が西側にのび、底面及び壁面は酸化している。 床面出土遺物 (第10図58~86・88~94・97~100・102・103・105)

床面上からの須恵器には杯B蓋、杯B、杯A、長頸壺、短頸壺、甕などの破片が出土した。

杯BⅢ蓋 $(58\sim71)$ 口径 $14.1\sim15.5$ cmの杯BⅢ蓋で、平坦な頂部に下方に折れる縁端部が付く。つまみは扁平で中央部が高まり、最大径 $2.6\sim3.1$ cm。頂部外面は、全て右まわりのロクロ削りされ、縁部近くまで施されているもの $(60\cdot70)$ もある。内面は一方向のナデ $(67\cdot68\cdot70)$ 、不定方向のナデ (69)、仕上ナデ $(61\cdot62)$ 、中心部までロクロナデ $(65\cdot66)$ がある。

杯B (72~86) 杯 B I (72) は口径9.4cm、高さ3.5cm、底部外面はヘラ切り。杯 B II (73~86) は口径13.1~14.8cm で底部外面はヘラ切り、ロクロナデされる。内面は、不定方向のナデ (82)、一方向のナデ (75) などがある。

杯AI (89~94・97~100) 口径11.4~13cmの杯AII。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け、内面は中心部までロクロナデと仕上ナデ調整する。

窯体覆土出土遺物 (第10図87・95・96・101・104)

杯BⅢ2(87)は口径14.8cm、高さ6.3cm、底部外面はロクロ削り、内面は一方向のナデ調整する。

広口壺(101)体部破片。体部外面下半はロクロ削り、底部外面はナデ付け及びロクロナデ調整。

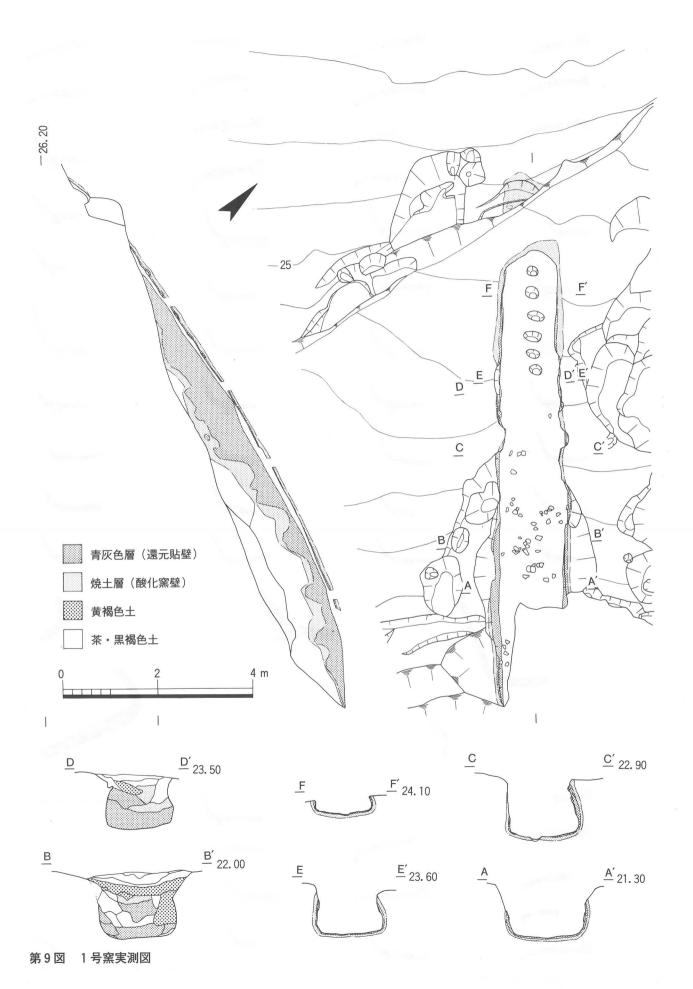
31号穴と出土遺物(第12図121~127、図版5の5)

2 号窯の東側に位置する直径27cm、深さ20cmの小さな穴である。覆土中から杯B蓋 5 点、杯BⅢ 2 点が出土した。 **杯BⅢ蓋** (121~125) 口径14.3~15.4cm、つまみは扁平で中央部がわずかに高まり、直径2.4~3cmを測る。頂部内面は一方向のナデ(121・122・125)、仕上ナデ(124)調整されたものがある。

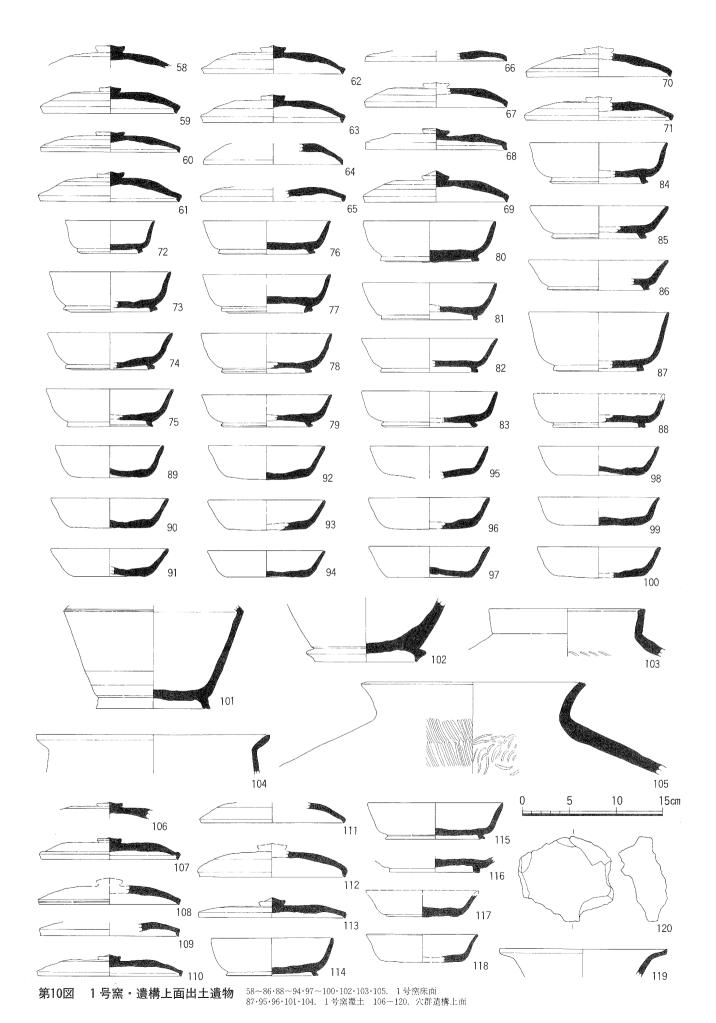
杯BⅢ (126・127) 口径13.4~14.4cmでわずかに屈曲した口縁部をもつ。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け。 **42~4号穴** (第11図、図版5の1~4)

 $2 \sim 4$ 号穴は $1 \cdot 2$ 号窯の間に位置し、2 号窯窯体を一部分破壊して構築される。穴はそれぞれ連結しており、底面の高さも一定ではない。下方から数回にわたって掘り込まれたものと推定され、4 号穴の一部が最も新しい。4 号穴覆土からは杯Aが22点、杯Bが1点の計23点が入子状に重ねられた状態で投棄されていた。これらには、底部または口縁部に亀裂が入っており、失敗品を一括投棄したものである。

穴の覆土は、黄褐色土、黒褐色土が複雑に入り込み、3・4号穴覆土上面からは還元、酸化窯壁まじり土が入り込むことなどから、これらの穴は1号窯の補修採土穴と推定される。



- 9 -



- 10 -

2号穴出土遺物 (第12図128~154)

2号穴からは、杯B蕎・杯B・杯A・杯C・杯D・長頸壺・甕、鉄滓などが出土した。

杯BⅢ蓋 (128~132) 口径14.6~16cm。頂部外面は全て右まわりロクロ削り。縁端部外面には凹線状のくぼみをめ ぐらすもの (129·131) がある。

杯BⅢ (133~137) 口径12.8~14cm、高さ4.1~4.3cm。口縁部は直線的に立ちあがるもの(133·135~137)が多い。高台は底部端に付き、低く外方にふんばる。底部外面はロクロ削り(137)、ヘラ切り、丁寧なロクロナデ(133)がある。

杯A I (138~145) 口径11.8~12.4cm、高さ2.8~3.45cm。底部は丸味をもつもの(141·145)、口縁部と底部の境にへ ラ入れ時の段を残すもの(139·144)がある。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け、内面は仕上ナデ調整が多い。

杯C (146·147) 口径12.5~12.6cm。口縁部途中で大きく屈曲し、縁端部は上方にのびる。2点とも生焼品で、底部外面はヘラ切り。147は口縁部と底部の境にヘラ入れ時の段を残す。

杯D (148) 口径13.6cmの生焼品。口縁部途中で大きく屈曲し、外彎気味にのびる。底部内外面の調整は不明。

3 号穴出土遺物 (第12図155~184)

3号穴からは、杯B蓋・杯B・杯D・甕・土師器小型壺が出土した。

杯B蓋 (155~168) 155~167は、口径14.5~16.5cmのBⅢ蓋。BⅣ蓋(168)は、口径17.1cmで頂部内面は仕上ナデ調整。 **杯B** (169~176) BⅢ₂ (169) は口径12.4cm、高さ7.6cm。底部外面は、ヘラ切り、ロクロナデ。BⅢ₁ (170~175) 口径13.2~14.2cm、高さ3.7~4.1cm。底部外面はヘラ切り、ロクロナデ、内面は、一方向のナデ調整が多い。

杯A (178·180~182) A I (178) 口径10.8cm、高さ4.3cm。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け。内面は、不定方向のナデ調整。A II (180~182) 口径12.2~12.9cm。

杯D (177) 2号穴出土 (148) とは高さが異なるが一応含める。口径13.2cm、高さ4.4cmで、底部近くに 1条の沈線がめぐる。底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け。内面は仕上ナデ調整。

4 号穴出土遺物 (第13図185~229)

4号穴からは杯B蓋・杯B・杯A・長頸壺・広口壺・小型壺・鉢などの破片が出土した。

杯BⅢ蓋 (185~190) 口径14.8~16.3cm。186のつまみの最大径は2.4cmと小さい。189の頂部には 2 条 2 ヶ所の沈線。 **杯B** (191~193) BⅢ (191·192) 口径11.5~12cm。高さは3.1~3.8cm。191の底部外面はヘラ切り、ロクロナデ。 BⅢ₂ (193) は口径13.6cm、高さ8.3cm。底部外面はロクロ削り。

杯AI (194~217) 口径11.2~12.9cm、高さ3.3~4.15cm。底部は丸味をもつものが多い。

長頸壺 (218·219·222~225) ラッパ状に開く長い口頸部を持ち、中ほどに沈線をめぐらす。218の口径は10.2cm。

広口壺 (220·221) 大きく開く口頸部に口縁端部は軽く上方につまみあげ、220の口径は17.8cm。頸部の高さは9.6cm。

小型壺 (226) 口径9.4cm、高さ6cm。底部外面はヘラ切り、ナデ付け調整。

11号穴と出土遺物 (第5図・第13図230~237)

調査地の南東端に位置する。穴は西側は破壊され、東側は調査区外に広がるため形状、規模は不明。北側地山面を約50cm掘り込み、平坦面を作る。覆土からは杯B蓋・杯B、土師器杯A、羽口、土師器甕などの破片が出土した。

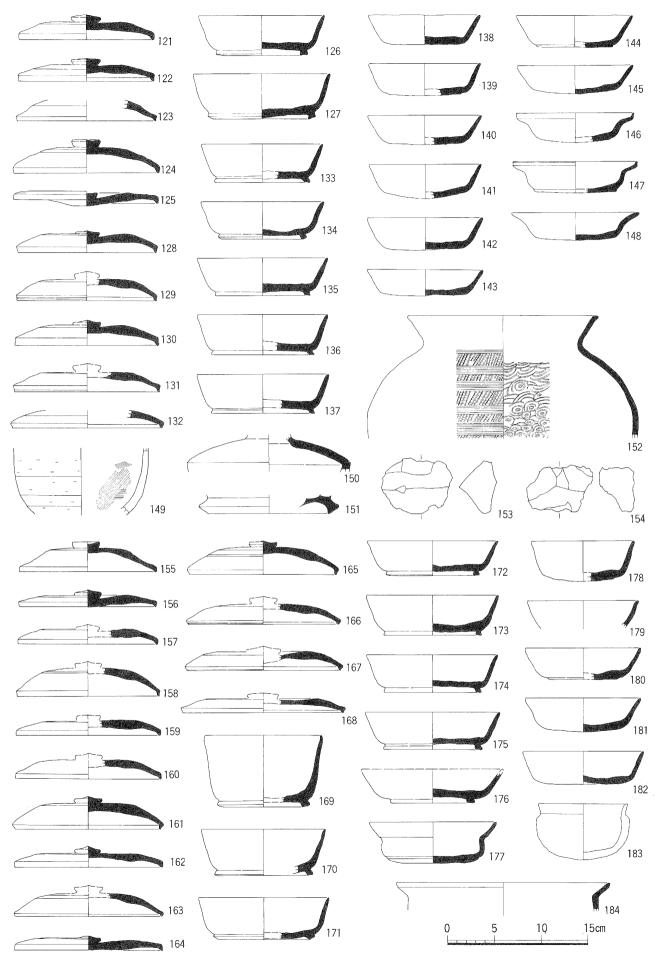
表採遺物 (第14·15図)

掘削土より多くの遺物が採取されている。全て1・2号窯焼成の須恵器である。

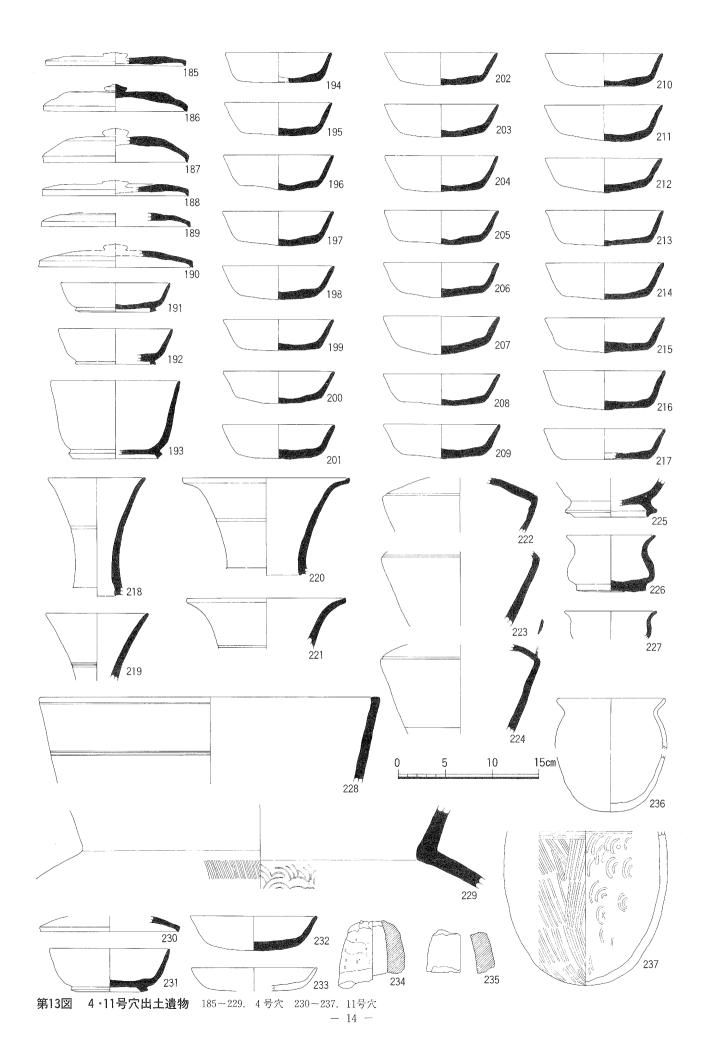
6西地区穴と出土遺物 (第8図54~57、図版5の9)

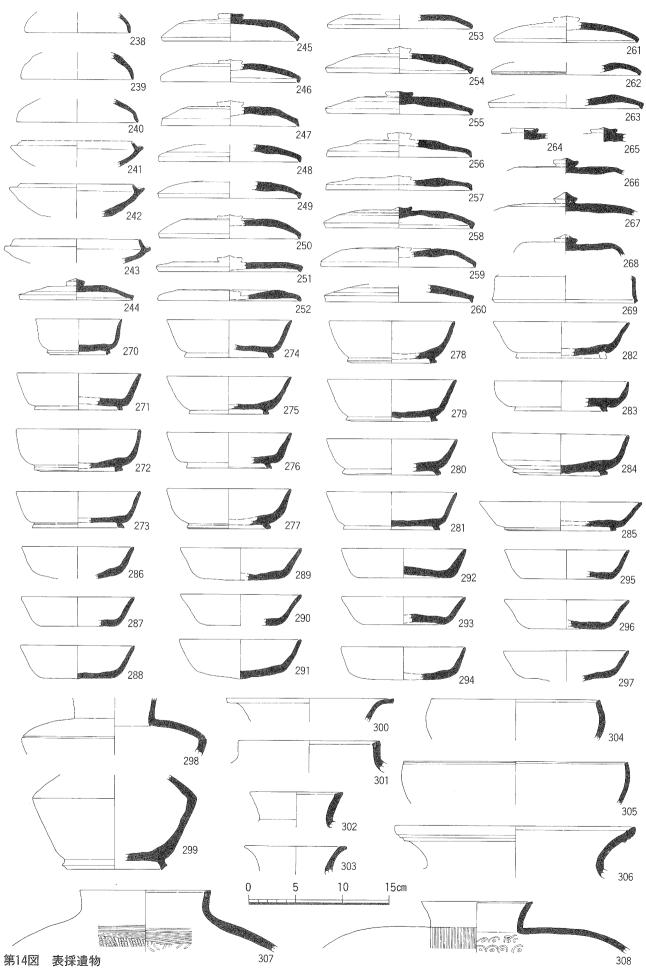
1号窯から南西方向約70mの土取り崖面に露出している穴である。穴の形状、規模は不明であるが、覆土は多くの炭化物を含む。出土遺物(54~57)は杯蓋、杯の破片で、2号窯と同時期である。 (池野)

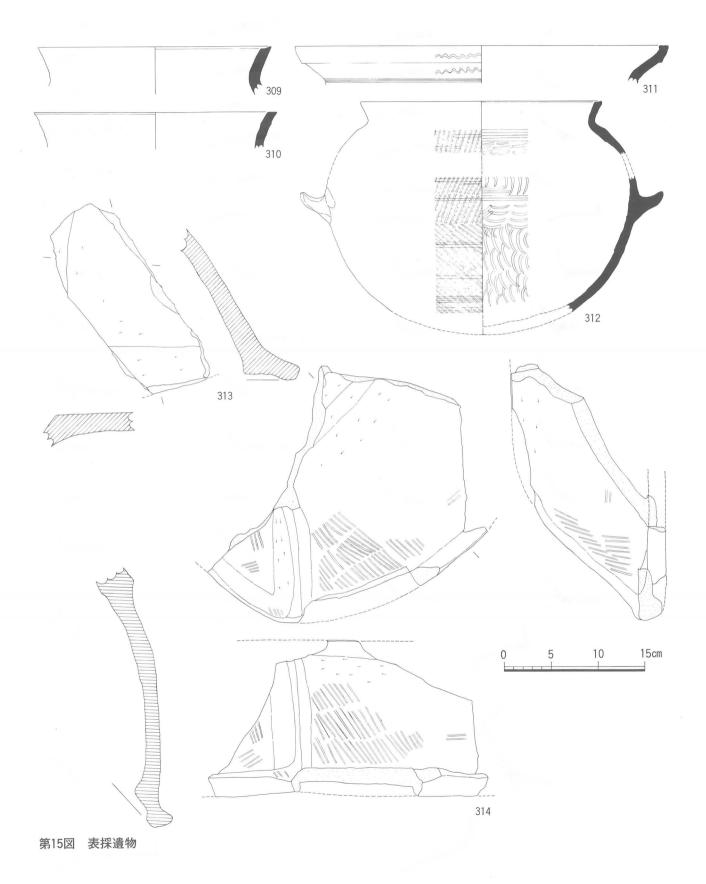




第12図 1・2・3 号穴出土遺物 121~127. 1 号穴 128~154. 2 号穴 155~184. 3 号穴







Ⅴ調査の成果

17世紀前半の須恵器

(1) 2号窯の出土遺物 (第6図1・2、第8図3~53)

2 号窯出土の須恵器の器種には、杯蓋、杯、高杯、聴、提瓶、横瓶、壺、甕がある。調査対象地が窯体だけで、しかも、窯体の前庭部が削平されているため、遺物の出土量は少ない。

杯蓋 A $(3 \sim 14)$ 頂部が丸みをもち、内面にかえりのつかない蓋である。口径によってA I $(11 \sim 12 \text{cm} 代)$ 、A II (13 cm 代)、A II (14 cm 代) に分かれ、A II が多い。口縁部内外面はロクロナデを、頂部外面はヘラキリのあとナデを、内面にもナデを行う。頂部外面のロクロケズリは 1 点 (7) だけである。器高は、 $3.5 \sim 5.0 \text{cm}$ であり、4 cm 前後のものが多い。ロクロ方向は右回りである。30個体。

杯A (15~26) 蓋受けの立上がりをもつ身である。受け部の径によってAI (13cm代)、AII (14cm代)、AII (15~16cm代) に分かれ、AII が多い。口縁部及び体部内外面はロクロナデを、底部外面はヘラキリのあとナデを、内面もナデを行う。口縁部外面に沈線を巡らすもの(20)がある。立上がりは内傾して上方にのびるが、水平になるものも 1 点(26)ある。器高は3.2~4cmのものがある。ロクロ方向は右回りである。25個体。

高杯 $(27 \sim 38 \cdot 42)$ 有蓋 A と無蓋 B がある。A は杯 A を身にした形で杯部外面下半にロクロケズリを行う。A 蓋 (27) は、凹状の紐がつき、杯部外面に浅い沈線が巡る。口径15.3cmである。B は杯部の形態から 2 つに分かれる。B は 杯部に凸帯が巡るもの。B は杯蓋 A を杯身にした形をする。B は口径12cm代、B は口径14cm、(17 cm)のものがある。 脚部には透しがあるものとないものとがある。脚部は外反し、端部は屈曲する。(17 個体)

瓰(38) 口縁部は外彎ぎみに外上方にのび、底部はケズリを行う。2個体。

提瓶(43)体部外面はカキメを、内面はロクロナデを行う。口縁部に沈線を巡らすものもある。3個体。

横瓶 図示しなかったが、体部外面にタタキのあとカキメを行い、内面にあて具痕がある。3個体。

壺(39)口縁端部が少し肥厚して、内面に面取る。頸部から体部外面はカキメを、底部はケズリを行う。

甕 $(1 \cdot 2 \cdot 40 \cdot 41 \cdot 45 \sim 48)$ 口縁端部は鋭るものと肥厚するものがある。後者は端部内面に面取るものと平坦なものがある。 $1 \cdot 2$ は大型品で、焼き台として利用されている。 4 個体。

陶錘(53) 完形の生焼け品で、窯体の先端部近くから出土。長さ11.5cm、直径1.7cmで、4mmの穴があく。重さ13.8 g。 その他 粘土塊に棒状のものを通した49、細長い長方体の一面を面取りした52がある。50・51は、内外面にタタキとあて具痕があり、ヘラ状工具で直径12~14cmの半月形の円弧を描いている。厚さ7mm。小杉流団No.7 遺跡の1号窯でも同様なものが出土している。土師器壺44は窯体の覆土から出土したもので、2号窯の覆土の一部を切る3・4号穴の遺物と考えられる。

表採遺物 (238~243) 2 号窯の前庭部と一部灰層を削平した土から表採されたものである。杯蓋はA I (238・239)、A II (240)、杯はA II (241・242)、A III (243)がある。甕 (306)は口径25.6cmで、口縁端部が肥厚し、内面に稜線がある。陶棺 (313・314)は蓋の破片で、3 点出土した。314は高さ21.5cm、厚さ2 cm前後で、幅は不明である。内外面にタタキのあと、ケズリとナデによって仕上げられているが、外面にタタキのあとがわずかに残っている。周縁部はやや肥厚し、その内面を面取りし、棺身を受けるための段が巡っている。313は314と同じ蓋の一部と考えられる。

以上、2号窯の出土遺物を要約すると以下の点になる。①調査が窯体だけのため、遺物の出土点数も少なく、器種全体を網羅されていない。②杯蓋 $A \ I \sim A \ II$ と杯 $A \ I \sim A \ II$ はそれぞれセットになり、 $A \ II$ が主体を占める。頂部及び底部の外面はヘラキリのあとナデを行うが、ロクロケズリのものは1 点ある。ロクロ方向は右回りである。③杯蓋B は出土していない。④高杯は $A \cdot B$ あり、脚部に透しのあるものもある。⑤土器以外に陶棺(後述)、陶錘、用途

不明品など特注品から種々雑多なものまで焼かれている。

(2) **上野遺跡第Ⅱ台地の8号住居跡** (第17図 1 ~52)

小杉町上野遺跡は本遺跡と同じ射水丘陵の先端部に立地し、先土器時代から近世に及ぶ大規模な遺跡である。遺構・遺物は第 I ~第 III 台地のすべてから検出された。このうち、第 II 台地の 8 号住居跡出土の一括品を図示した。遺物には生焼け品や焼けひずみのあるものがある。

杯蓋 A (1~12) 口径によってA I (11~12cm代)、A II (13cm代)、A II (14cm代)に分かれ、A II が多い。器高は3.4~4.6cmで、4 cm前後のものが多い。口縁部内外面はロクロナデを行い、頂部外面はヘラキリのあとナデを行う。ロクロ方向は右回りである。

杯A (13~34) 受け部径によってA I (12~13cm代)、A II (14cm代)、A II (15cm代) に分かれ、A II が多い。器高は14 以外は3.0~4.2cmで4.0cm前後が多い。口縁部内外面はロクロナデを行い、底部外面はヘラキリのあとナデを、内面はナデを行う。8 だけ口縁部下半 (1/5) 以下底部まで丁寧にロクロケズリを行う。ロクロ方向は右回りである。

杯B (36~39) 器高の高い椀形の身で、口径は10~11cmである。体部外面に沈線があるものとないものがある。前者は体部から底部にかけてロクロケズリを行い、後者はロクロナデだけである。37の器高は5cmである。

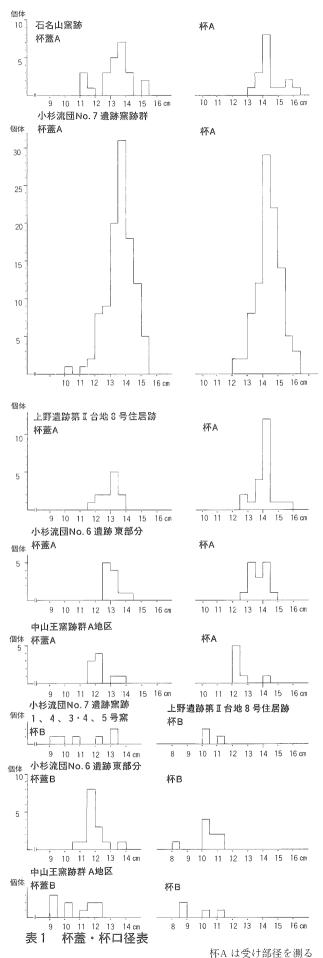
その他 高杯(46·47)、鉢(40)、横瓶(48)、平瓶?(43)、 器台(42)、台付壺(41·50)、短頸壺(51)、甕(49·52)がある。

(3) 小杉流団№.6 遺跡の東地区出土遺物 (第18図 1 ~46)

No.6遺跡は本遺跡から約500m南にある古墳時代の集落跡である。この遺跡の東斜面地及び土器溜り(X10列以北Y17列以東の部分にあたり、ここでは東地区と仮称する。)には、遺構がほとんどなく、遺物は包含層から検出された。

杯蓋 A (1~10) 口径によってA I (10~11cm代)、A II (12cm代)、A II (13~14cm代) に分かれ、A II が多い。器高は3.2~4.7cmで 4 cm前後が多い。頂部外面はヘラキリのあとナデを、内面はナデを行う。ロクロ方向は右回りである。

杯蓋B (25~35) 蓋内面のかえりが口縁端部から下に出るもので、乳頭状の紐のあるもの (B₁) とないもの (B₂) がある。B₁は頂部外面の1/2以下をロクロケズリを行う。B₂は頂部外面をヘラキリのあとナデを行う。B₁とB₂はかえりの形態も違う。B₁は杯Aを逆転させたようで、B₂はかえりと



杯A (11~24) 底部外面はヘラキリのあとナデを行う。受け部径によってA I (12~13cm代)、A II (14cm代) に分かれ、A I とA II は同じ割合である。器高は3.1~4.5cmで、3.5cm前後のものが多い。

杯B (36~39) 体部外面に沈線が巡る。沈線以下底部までロクロケズリを行う。口径によってBI(8 cm代)、BI (10~11cm代)に分かれ、BIが大部分である。器高は5.2~5.5cmである。杯蓋Bとセットになると考えられる。

その他 高杯はA(46)、Bあり、脚部は短い。短頸壺、台付壺、鉢、横瓶、提瓶、平瓶、 嘘などがある。

(4) 中山王窯跡群 A 地区の出土遺物 (第18図47~72)

上市町中山王窯跡群は県東部にある遺跡で、B地区には7世紀末の瓦陶兼業窯がある。A地区は山腹に走る用水路の改修に伴って窯の灰層が2ヶ所確認された。それぞれ46~54と55~72の遺物が出土した。ここでは前者を1群、後者を2群と仮称する。1群と2群は浅い谷で分かれる。1群は窯が1基と考えられるが、2群は遺物に時期幅があり、窯の数は不明である。

1群($47\sim54$)遺物量が少なく、器種のバラエティーは把握できないが、杯蓋 B は出土していない。杯蓋 A・杯 A とも口径12cm前後のものが目立つ。器高は47が3.6cmだが、 $49\cdot50$ が 3 cm以下になる。頂部及び底部の外面はヘラキリのあとナデを行い、内面はナデを行う。杯 A の立上がりも短くなる。杯 B は作りがやや厚い。口径は8.5cm、 $9.8\sim10.9$ cmであり、器高も 5 cm前後である。高杯は脚部が外反して開き、2 段透しのものもある。

2群(55~72)杯蓋 A・杯 A は口径12cm前後のものが目立つ。56の頂部外面はロクロケズリである。ロクロ方向は右回りである。杯 B は作りが厚いものと薄いものがある。口径は $9 \sim 10.4$ cmで、沈線が巡るものがある。杯蓋 B は蓋内面のかえりが口縁端部より下に突出しないもので、紐が付き、頂部外面にロクロケズリを行う。

(5) 編年的位置

る。

以上述べてきた杯蓋・杯の形態から上記の遺跡の位置づけを考えてみたい。

杯蓋A 本遺跡では口径13cm代、器高4cm前後のものが主体を占め、上野遺跡でも同様な傾向を示すが、No.6 遺跡では口径12cm代と少し小さくなる。中山王窯跡群の1群は口径が少し小さくなり、立上がりも短くなる。

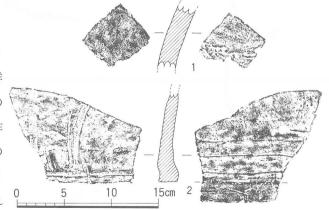
杯A 本遺跡では受け部径14cm代(口径12cm代)、器高4cm前後のものが主体を占め、上野遺跡でも同様な傾向を示すが、No. 6 遺跡では受け部径(口径も同様)も少し小さく、器高も少し低くなる。中山王窯跡群の1群でも同様に縮小化が続く。

杯蓋B 本遺跡、上野遺跡では出土していないが、No. 6 遺跡では見られる。中山王窯跡群1群では遺物量が少なかったため検出されていないが、杯蓋Bを伴う時期と考える。

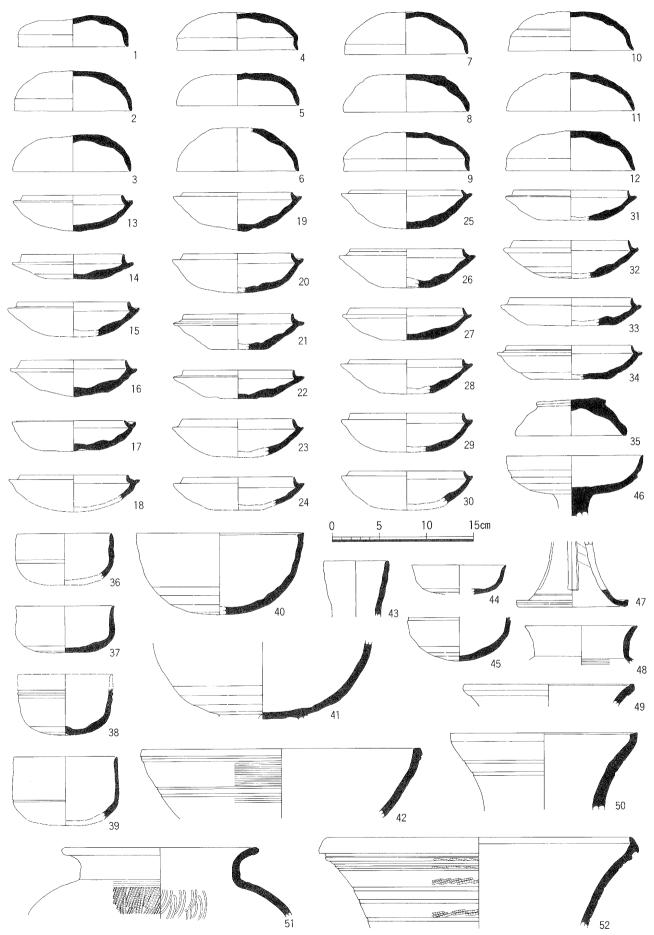
杯B 本遺跡では出土していないが、上野遺跡では口径10.5~11.5cmが多く、No.6遺跡や中山王窯跡群1群でも同様な傾向を示している。杯Bは杯蓋B以前に出現し、

No.6遺跡では杯蓋Bとセットになると考える。

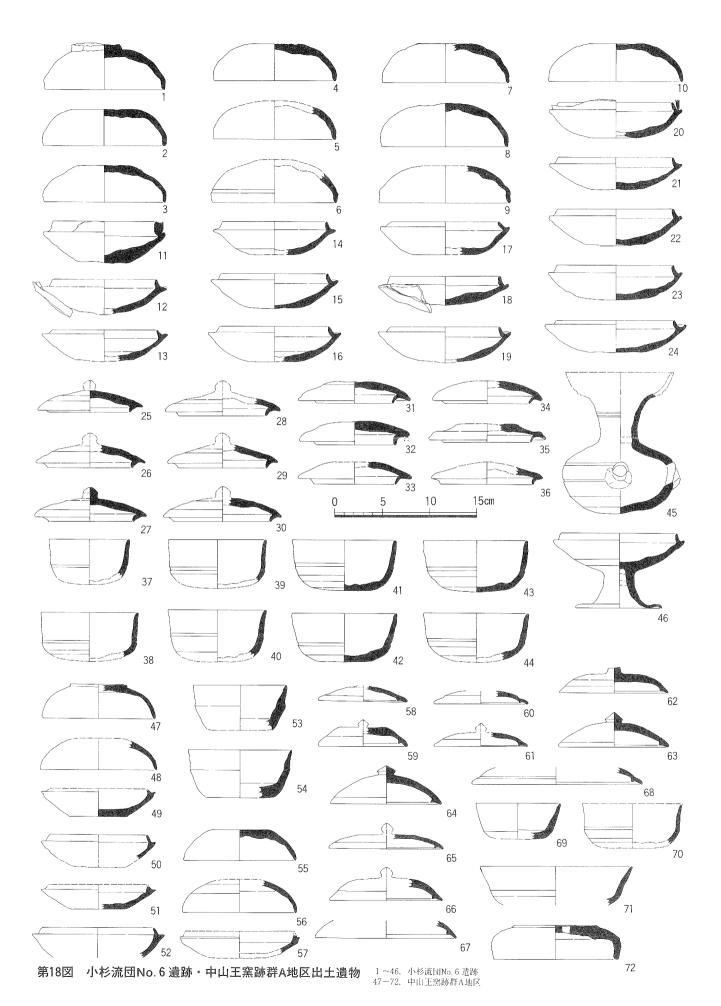
以上の杯蓋・杯の推移から、本遺跡 2 号窯、上野遺跡 8 号住居跡→No.6 遺跡東地区→中山王窯跡群 A 地区 1 群と新しくなると考えられる。上野遺跡 8 号住居跡の14のように器高が低く、ロクロケズリの杯 A は、受け部の作りからNo.6 遺跡の杯蓋 B に類似し、杯蓋 B 出現直前の一様相を示している。また、No.6 遺跡での杯蓋 B の 2 形態の存在は、試行錯誤の一様相を示すものと考えられ



第16図 陶棺実測図1. 小杉流団No.6遺跡 2. 平岡窯跡



第17図 上野遺跡第Ⅱ台地8号住居出土遺物



- 21 **-**

ところで、本遺跡とその約550m南西にある小杉流団No. 7 遺跡 $1 \sim 5$ 号窯を比較してみる。No. 7 遺跡の杯蓋 A は口径13cm代が、杯 A は受け部径14cm代(口径12cm代)が主体を占める。杯蓋、杯ともヘラキリのあとナデ調整がほとんどで、ロクロケズリは数点である。杯 B も数点出土し、底部外面にロクロケズリを行う。ロクロ方向は右回りである。高杯は A ・ B ともあるが、No. 6 遺跡の46のような短脚のものはない。以上の特徴から、本遺跡 2 号窯と小杉流団No. 7 遺跡 $1 \sim 5$ 号窯は同じ時期と考える。

さて、畿内の7世紀の須恵器は飛鳥第Ⅰ~V期に分類されている。第Ⅰ期は杯蓋A・杯Aが主体を占めるが、一部に杯蓋Bを含む。杯蓋A・杯Aは口径14㎝前後で、器高4㎝前後である。杯蓋Bは口径10~11㎝前後で、乳頭状の紐が付くという特徴がある。この点を踏えて上記の県内の須恵器の年代は、以下のようになる。本遺跡2号窯、小杉流団№.7遺跡1~5号窯、上野遺跡8号住居跡の出土遺物は杯蓋A・杯Aが主体で、杯蓋Bを含まない点と口径から、飛鳥第Ⅰ期の前半にあたり、7世紀初頭の年代が考えられる。№.6遺跡東地区の遺物は、杯蓋Bを若干含んでいる点と杯蓋A・杯Aの口径から、飛鳥第Ⅰ期の後半にあたり、7世紀第1四半期の後半が考えられる。しかし、杯蓋Bの口径が第Ⅰ期より大きい点からやや古い様相を示すものか。中山王窯跡群A地区1群は第Ⅱ期にあたり、7世紀第2四半期と考える。杯蓋A・杯Aの口径は第Ⅲ期のSG100の杯(口径10㎝、10.7㎝)と比較するとやや大きく、第Ⅲ期でも古い方に属するのであろうか。

2 陶棺について

陶棺は表採品なので、1・2号窯のいずれかに属するものかは決めがたい。しかし、石川県金比羅山窯跡などの7世紀前半の出土例などから、2号窯で焼かれたものと考えておく。県内では小杉流団No.6遺跡の東地区から1点(第16図1)出土している。小破片なので明確でないが、器厚2cm前後で、外面にタタキ、内面にあて具痕の上からケズリを行う点や焼成、胎土から、陶棺の蓋(?)の一部と考えたい。また、2は平岡窯跡の採集品(後述)である。器厚は1.3cm前後で、内外面はナデを行う。端部は面取る。陶棺の蓋の破片になれば、7世紀第4四半期から末のものである。 (宮田)

37世紀末から8世紀前半の須恵器

(1) 1号窯及び周辺穴出土遺物

1号窯及び周辺穴出土須恵器を一括して扱う。器種には杯B蓋、杯B、杯A、杯C、杯D、壺蓋、長頸壺、広口壺、 横瓶、鉢、甕などがあり、杯B蓋、杯B、杯Aが大部分を占める。

杯B蓋 全体が厚作りでシャープさを欠く。頂部は平坦でスムーズに傾斜して縁部に至るものが多く、笠状の高いものは無い。頂部外面は全て右まわりロクロ削りが施され、丁寧なものは縁部近くまで施す。縁端部外面に凹線状のくぼみがめぐるものが少量ある。

杯B 口縁部が直線的に外傾するものと、途中で傾斜を変えるものがあり、後者が多い。高台の位置は、口縁部と底部の境からわずかに内側に付くものが多く、境近くに付くもの(133・137)、大きく離れるもの(176・283)も少量ある。低くわずかにふんばる高台が一般的で、端部は外端部があがるもの、平坦なもの、口端部があがるものがある。

法量によって杯 B I (口径9.1~9.4cm、高さ3.5~3.8cm)、杯 B II (口径11.5~12cm、高さ3.1~3.8cm)、杯 B II (口径12.6~14.8cm、高さ3.1~4.9cm)、杯 B II ₂ (口径12.4~14.8cm、高さ6.3~8.3cm)、杯 B IV (口径17.4cm、高さ3cm) に分ける。出土量は、2・2・45・3・1 点をそれぞれ数える。杯 B I の底部外面はヘラ切り。杯 B II の底部外面はロク

ロ削りとへラ切り、ロクロナデ調整があり、内面は一方向のナデ調整する。杯 B Ⅲ の底部外面はヘラ切り、ロクロナデ調整が大部分で、ロクロ削りは 3 点のみである。284は底部外周から口縁部下半をロクロ削りする。内面は一方向のナデ12点、指先による仕上ナデ 9 点、不定方向のナデ 4 点がある。径高指数は30前後が多い。杯 B Ⅲ 2 の底部外面はロクロ削り調整が 2 点ある。杯 B Ⅳ は底部外面へラ切り、内面不定方向のナデ調整。

杯A 平底、丸底があり、前者が多い。口縁部と底部の境にヘラ入れ時の段を有すものが少量ある。

法量によって杯A I (口径10.8cm、高さ4.3cm)、杯A II (口径11.2~13.4cm、高さ2.8~4.2cm) に分ける。出土量は、 $1\cdot61$ 点をそれぞれ数える。杯A I の底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け、内面は不定方向のナデ調整する。杯A II の底部外面はヘラ切り、軽いナデ付け、内面は中心部までロクロナデ及び指先による仕上ナデが大部分で、一方向のナデ調整したものが 2 点のみ。径高指数はばらつきが大きいが26~31が大部分を占める。

杯C 特殊な形態の無高台杯で2点出土。2点とも生焼品で、器面は風化して明確でないが、底部外面は、ヘラ切り未調整と推定される。

杯D 杯Cと同様に口縁部途中で屈曲し、大きく外傾する形態の無高 台杯。2点あり、両者の器形は若干異なるが一括して扱った。177の底 部外面はヘラ切り、軽いナデ付け。

壺蓋 表採品の中に 2 点ある。破片で全体を知りえないが、なで肩と 肩の張るものがある。269の縁端部の形態は、外端部があがり先端は尖る。

長頸壺 外傾して長くのびた口頸部の中ほどに沈線がめぐる。高台は 外端部があがり、ふんばる。

広口壺 破片のみ。口縁端部はわずかにつまみあげられた形態で丸味をもつ。101の高台の外端部はあがらず、直線的にのびてふんばる。

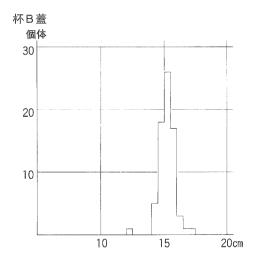
横瓶 表採品の中に 3 点ある。口縁端部が内傾するもの(302・308)、 平坦なもの(303)がある。口径9.8~12cm。

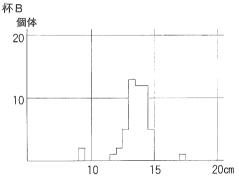
鉢 表採品の中に鉄鉢が 2 点ある。口縁端部が内傾し、305の外面に 沈線がめぐる。口径23.6cm。

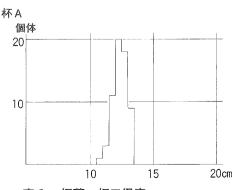
甕 土師器甕の形態を模したものと、把手付甕がある。前者は頸部で屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。内外面ロクロナデ。把手付甕は、表採品で、口径25.4cmに縁端部はわずかに内傾し、体部外面にタタキメ、カキメ、内面にアテ具痕、カキメを残す。

以上記述した内容を要約すると、

- 1. 調査は窯体内及び窯体横に位置する穴のみである。従って、出土 須恵器が1号窯焼成器種を網羅しているかどうかの問題を残す。
- 2.1の問題があるが、焼成器種には、杯B蓋、杯A、杯B、杯C、 杯D、壺蓋、長頸壺、広口壺、横瓶、鉢、甕がある。量は杯B蓋、杯B、 杯Aの杯蓋類が大部分を占めるが、他の器種も一定量焼かれる。
- 3. 杯 B 蓋は杯 B Ⅲ 蓋、杯 B は杯 B Ⅲ、杯 A は杯 A Ⅱ を中心に焼かれ、他は少量である。
 - 4. 杯BⅢに高さによる器種分化が認められる。
 - 5. 金属器を模した杯蓋、杯類は見られない。







(2) 射水丘陵窯跡との比較

射水丘陵窯跡のうち、比較的様相の近い平岡窯跡、小杉流団No.16遺跡 1・2 号窯跡を取り上げてみる。

①平岡窯跡

平岡窯跡は石名山窯跡とは直線距離で南東方向 6 kmの射水丘陵東端に位置する。未調査窯跡で用水壁面に $20\sim30 \text{ m}$ にわたって灰層が露出している。窯跡数は不明で、 $1\sim2$ 基程度と推定される。

採取遺物 (第19図)

採取須恵器には、杯A蓋、杯B蓋、杯A、杯B、長頸壺、甕などの破片があるが、ここでは、杯A蓋、杯B蓋、杯A、杯Bを紹介する。

杯A蓋 (1~20) 縁部近くの内面にかえりをもつ蓋で、頂部は平坦でスムーズに縁部に至る。全ての頂部外面は右まわりのロクロ削りが施され、縁部近くはロクロナデされる。かえりの先端は、口縁端部より下方にのびるものは1点のみで、その他は同一か、わずかに短い。かえりの形態は、バラエティーに富み、数種類に分かれる。

口径によって杯A II 蓋 $(1\sim12$ 、口径10.8~14.4cm)杯A III 蓋 $(13\sim15$ 、口径14.5~16.4cm)、杯A III 蓋 $(16\sim18$ 、口径16.8~18.4cm)、杯A III 蓋 $(19\sim20$ 、口径19.4~20.8cm)に分ける。量は、58・21・7・6 点をそれぞれ数え、杯A III 蓋が6割を占める。杯A III 蓋のつまみの最大径は2~3 cmのものがある。頂部内面調整は中心部までロクロナデするのが多く、指先による仕上ナデが少量ある。杯A IIII 蓋の頂部内面も中心部までロクロナデするものが多く、不定方向のナデを加えるものは2点のみ。つまみの最大径は2.5~2.6cm。杯A III 蓋の頂部内面調整には不定方向のナデを加えるものが3点あり、杯A IIII 蓋の56は中心部までロクロナデする。

杯B蓋(21~41) 縁端部が下方に折れる蓋。平坦な頂部からスムーズに縁端に至るものと、高さがあり肩で稜をなすものの2形態があり、前者が多い。また、縁端部形態には、稜を明瞭にして折れるものと、単に折り曲げて丸味をもつものがあり、それぞれに先端が内傾、垂下、外傾したものが含まれる。全ての頂部には右まわりのロクロ削りが施される。

□径によって杯 B II 蓋 (21~28、□径11.4~13.8cm)、杯 B II 蓋 (29~31、□径14~16.4cm)、杯 B II 蓋 (32~39、 □径16.8~19.4cm)、杯 B V 蓋 (40·41、□径19.6~21.8cm) に分ける。量は21·27·66·5点をそれぞれ数え、杯 B II 蓋のつまみの最大幅は2.0~3.0cmのものがあり、頂部内面の調整は、中心部までロクロナデするものが多数を占め、指先による仕上ナデ、不定方向のナデが少量ある。杯 B II 蓋になると、内面調整は不定方向のナデが 6 割を占めるようになる。つまみの最大径は2.8~3.1cm。杯 B IV 蓋の頂部内面調整は、不定方向のナデがさらに増え8割を占める。つまみの最大径は2.9~3.5cm。杯 B V 蓋の内面調整も、不定方向のナデが多数を占める。

杯B (42~57) 外傾する口縁部に高台が付く杯。口縁部には直線的に外傾するもの、途中で外傾度を変え、さらに 外彎気味にのびるもの、大きく弧を描いて直立気味になるものなどがある。高台は、口縁部と底部の境よりわずか内 側に付くのが一般的で、境近くに付くもの、大きく内側に入るものも少量ある。形態は太くて低く、外端部があがる ものが多い。底部は平坦で大きくさがるものはない。

法量によって杯BI (口径7.8cm、高さ4.3cm)、杯BII (42~45、口径10.4~13cm、高さ3.6~4.8cm)、杯BIII (46~54、口径13.4~16.2cm、高さ3.5~5.0cm)、杯BIV (55、口径16.6~18cm、高さ3.5~4.8cm)、杯BV (56・57、口径19~20cm、高さ4.2~5.1cm) に分ける。量は、 $1 \cdot 7 \cdot 32 \cdot 12 \cdot 3$ 点をそれぞれ数える。杯BII の底部外面はヘラ切り、ロクロナデが多いが、44のように底部から口縁部下半までロクロ削りするものもある。内面調整は全てロクロナデ。杯BIII の底部外面にはロクロ削り調整が2割程度含まれ、内面も一方向のナデ、不定方向のナデが多くなる。杯BIV、杯BVになるとさらにロクロ削りの割合が増え、内面調整も、不定方向のナデが多数を占める。

杯A (58~75) 無高台の杯。器形はバラエティーに富む。口縁部の傾斜は、外傾度の小さいもの、大きいものがあり、その中には直線的なもの、途中で傾斜を変えるものなどが含まれる。底部は平底に近いもの、丸底気味のものがあり、前者が多い。

法量によって杯A [[(58~74、口径10.2~14cm、高さ2.7~4.1cm)、杯A [[(75、口径15.2~16.5cm、高さ3.5~4.6cm) に分ける。量は、杯A [[64点、杯A [[2点である。杯A [[の底部外面は全てヘラ切り、軽いナデ付け調整で、ロクロ削りを施すものはない。内面は中心部までロクロナデするものが大部分で、わずかに指先による仕上ナデ、一方向のナデ、不定方向のナデがある。杯A [[の底部外面もヘラ切りで、内面は不定方向のナデ、指先による仕上ナデが施される。

以上記述した内容を要約すると、

- 1 杯A蓋、杯B蓋の比率は、採取遺物という前提で、大略1対2~3程度で、杯B蓋が多い。杯A蓋は杯AⅡ蓋から杯AⅤ蓋までみられるが、杯AⅡ蓋を中心に焼成する。杯B蓋も同様に杯BⅡ蓋から杯BⅤ蓋まであり、杯BⅣ蓋を中心に焼成し、両杯蓋は焼く主体の口径を異にする。
- 2 杯 A 蓋の頂部内面調整は、中心部までロクロナデするものが多く、杯 A Ⅲ 蓋、杯 A Ⅳ 蓋に少量の不定方向のナデがみられる。これに対して杯 B 蓋は、杯 B Ⅱ 蓋以外は不定方向のナデが多数を占める。
- 3 杯Aには杯AⅡと杯AⅢがあり、杯AⅡを中心に焼く。この杯Aとセット関係にある杯A蓋にはそれ以上の口径のものが認められることから、少なくとも杯AⅣ蓋、杯AⅤ蓋は杯BⅣ、杯BVとセットになるであろう。
- 4 杯Bには杯BIから杯BVまで認められるが、高さに大きな差はなく、口径差だけであり、高さによる器種分化は認められない。

②小杉流団No.16遺跡2号窯

昭和54年県教委が調査した。窯体は操業途中で大改修されており、操業当初の窯体を2号窯ーⅡと呼ぶ。2号窯ー

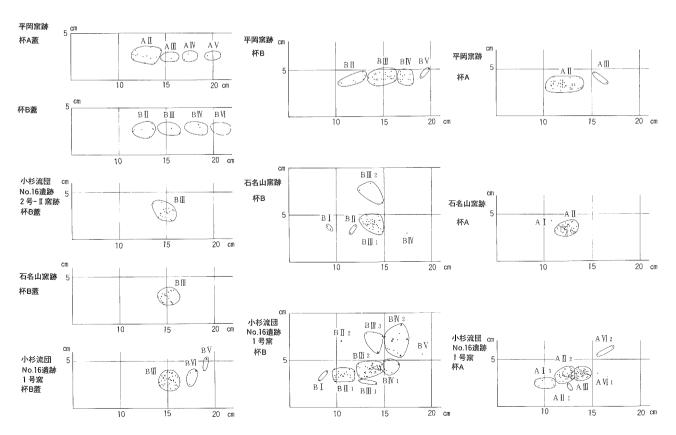
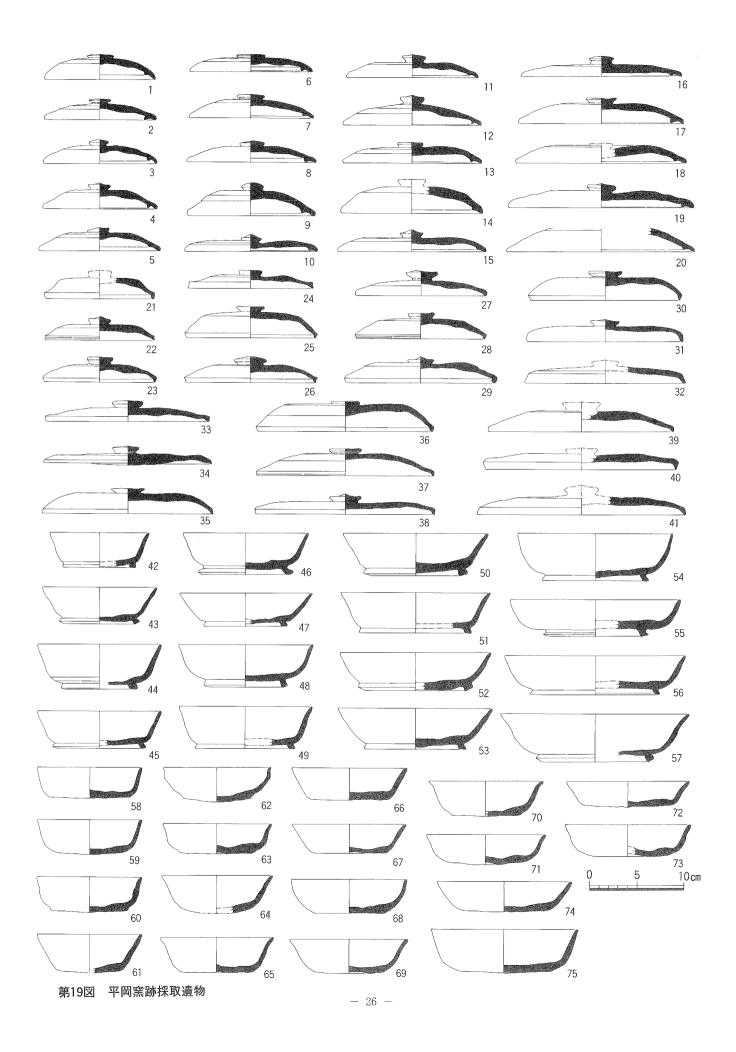


表3 法量表(▲は沈線をめぐらす杯蓋・杯)

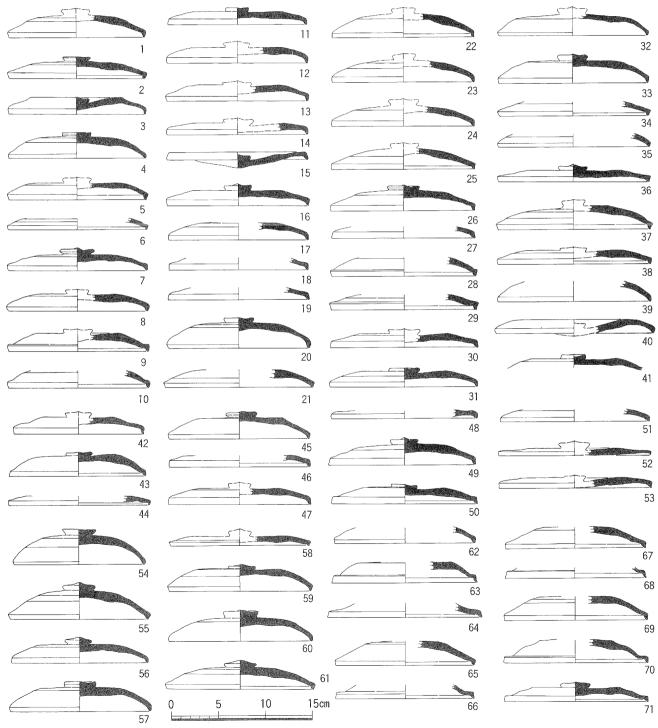


IIの焚口から燃焼部にかけての側壁周辺を掘削し、その掘削土で床面を埋め、前庭部とする。この結果、窯体規模は当初に比べて2.5m縮小して操業を再開する。これを 2 号窯-I と呼ぶ。ここで紹介する器種は杯 B 蓋のみである。

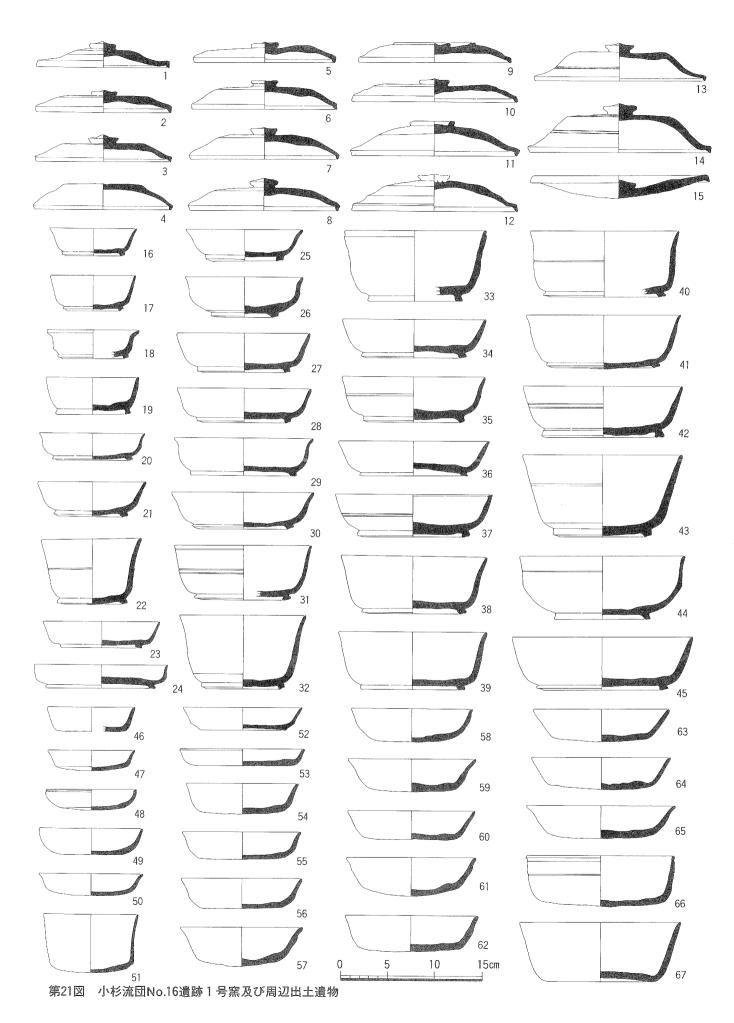
2号窯-Ⅱ出土遺物 (第20図1~61)

2号窯- Π の出土遺物には、埋土下の最終床面(1~41)、3本の排水溝(42~53)、灰層及び周辺(54~61)などがある。

| 杯B蓋 | 杯BⅢ蓋 (口径13.6~16.5cm) のみ。平坦な頂部からスムーズに縁部に至るものと、肩がはるものがあり、前者が多い。縁端部の稜は明瞭なものが多く、単に折りまげて丸味を持ち、端部を挽き出すものが少量ある。頂部外



第20図 小杉流団No.16遺跡 2 号窯- I・II 出土遺物 1~41. 2 号窯- II 最終床面 42~53. 2 号窯- II 排水溝 54~61. 灰層及び周辺 62~64. 2 号窯- I 焚口 65~71. 2 号窯- I 最終床面



面は全て右まわりのロクロ削りが施される。内面調整は、中心部までロクロナデされるものが最も多く13点、一方向のナデが11点、不定方向のナデ5点、指先による仕上ナデが5点ある。つまみの最大径は、2.5~3.7cmのものがあり、大型が多い。形態は中央部がわずかに高くなるものと、平坦なものがある。

2号窯-I出土遺物(第20図62~71)

2号 第一 「の出土遺物は、焚口及び最終床面出土遺物である。

杯B蓋 杯BⅢ蓋(口径14.5~16.1cm)のみ。平坦な頂部から肩がはって縁部近くに至る。縁部は屈曲して水平にのび、奈文研でいうA形態が多くなる。63・68は薄く鋭く仕上げられたものである。頂部外面は、右まわりのロクロ削りを施す。ただし、70はヘラ切り、ロクロナデ調整。71の内面調整は中心部までロクロナデ。

③小杉流団No.16遺跡 1 号窯跡

昭和58年に県教委が調査した。2号窯跡の東方向約45mに位置する。灰層及び周辺部からは整理箱で300箱以上の膨大な量の遺物が出土している。

1 号窯及び周辺遺構出土遺物 (第21図 1 ~67)

杯 B 蓋、杯 A、杯 B、皿、高杯、長頸壺、広口壺、短頸壺、横瓶、鉢、盤、甕、硯など多くの器種が出土している。 1号窯も2号窯と同様に操業時間幅を考慮する必要があるが、未整理段階であるので一括した。ここでは、杯 B 蓋、杯 B、杯 A を紹介する。

杯B蓋 $(1 \sim 15)$ 平坦な頂部からなだらかに縁部に至るもの、肩で稜をなすもの、肩に突帯をもつもの、環状のつまみをもつもの、つまみが付かないもの、頂部外面に沈線がめぐるものがあり、縁部形態には、A 形態も認められる。頂部外面は、右まわりのロクロ削りが施される。ただし、つまみがつかない 4 は、ヘラ切り未調整である。

口径によって、杯B \blacksquare 蓋($1\sim9$ 、口径 $14.1\sim16.3$ cm)、杯B \S 蓋($10\sim13$ 、口径 $17.3\sim18.0$ cm)、杯B \S 蓋($14\sim15$ 、口径 $18.8\sim19.1$ cm)に分ける。杯B \S 蓋が最も出土量が多く、頂部内面の調整は、中心部までロクロナデが 4 割、指先による仕上ナデが 3 割を占め、他に一方向のナデ、不定方向のナデがある。杯B \S 基には、頂部外面に沈線をもつものがあり、内面調整は、中心部までロクロナデが半分を占める。杯B \S 基も同様で、14の高さは5.25cm、つまみの最大径は3.6cmを測る。

杯B (16~45) 外傾した口縁部に低くふんばった高台が付く。高台は、外端部がわずかにあがるものが最も多い。 法量によって杯B I (16・17、口径8.2~8.9㎝、高さ2.9~3.8㎝)、杯 B II: (19~21、口径9.8~11.8㎝、高さ2.8~4.0㎝)、杯 B II: (22、口径10.5㎝、高さ7.0㎝)、杯 B III: (23・24、口径12.4~14.1㎝、高さ2.5~2.8㎝)、杯 B III: (25~30、口径12.2~14.8㎝、高さ3.1~4.7㎝)、杯 B III: (31~33、口径13.1~14.8㎝、高さ5.8~7.8㎝)、杯 B IV: (34~37、口径15~16.7㎝、高さ3.7~4.9㎝)、杯 B IV: (38~44、口径15.1~17.4㎝、高さ5.45~8.7㎠)、杯 B V (45、口径19㎝、高さ5.65㎝) に分ける。杯 B I の17の底部外面はロクロ削り。杯 B II: の底部外面はヘラ切りが主体でわずかにロクロ削りを施すものがある。内面は中心部までロクロナデするのが主体を占める。杯 B II: は口縁部途中に1条の沈線がめぐり、底部外面の調整はロクロ削り。杯 B III: の底部外面調整にはヘラ切りとロクロ削りがある。高さが低く、有台皿とすべき器種かもしれない。杯 B III: は出土量が最も多く、口縁部に沈線をもつものが含まれる。底部外面は、ヘラ切りを主体に2割程度のロクロ削りが含まれる。杯 B III: の31の底部外面はヘラ切り調整。口縁部外面に沈線がめぐる杯 B IV: の底部外面にはヘラ切り、ロクロ削り調整がある。内面は一方向のナデ、指先による仕上ナデが多い。杯 B IV: には、口縁部外面に沈線をもつものの割合が多くなる。底部外面はロクロ削りが施されるものが多いが、ヘラ切りのものも存在する。杯 B V の底部外面はヘラ切り。

杯A (46~67) 外傾する口縁部に平底及び丸底気味の底部をもつ無高台杯。

法量によって杯AⅠ: (46~50、口径9.1~11cm、高さ2.2~2.8cm)、杯AⅠ: (51、口径10cm、高さ6.2cm)、杯AⅡ:

(52・53、口径12.5~12.8cm、高さ1.8~2.4cm)、杯A \coprod 2(54~58、口径11.4~13.1cm、高さ2.65~4.2cm)、杯A \coprod (59~64、口径13.2~14.2cm、高さ2.95~4.1cm)、杯A \coprod 1(65、口径15.5cm、高さ3.5cm)、杯A \coprod 2(66・67、口径15.5~17.0cm、高さ5.5~6.3cm)に分ける。杯A \coprod には器形の異なるものも含み、細分の可能性を残す。48の底部外面はロクロ削り。杯A \coprod 2の底部外面はヘラ切り。杯A \coprod 1の高さは低く、皿とすべき器種かもしれない。杯A \coprod 2の出土量が最も多く、底部外面はヘラ切り、軽いナデ付けが主体。杯A \coprod は最終床面上に残された焼成不良品であり、灰層及び周辺からの出土はほとんどない。杯A \coprod 2と杯A \coprod の口径は一部重複して認められる。杯A \bigvee の底部外面はヘラ切り。66の口縁部外面には、沈線がめぐる。杯A \bigvee 2:杯A \bigvee 2 は椀とすべき器種かもしれない。

(3) 編年的位置(表3)

前述した窯跡の前後関係について考えてみたい。この中で最も古い窯跡は平岡窯跡である。杯 A 蓋を伴い、杯 B に高さによる分化が認められないことなどが特徴である。次に小杉流団No.16遺跡 2 号窯 $- \mathbb{I}$ が上げられる。杯 B 蓋の端部に単に挽き出しただけのものが含まれている。ただし、杯 B 蓋を中心に焼かれる口径の縮小化や、頂部内面調整の簡略化などから平岡窯跡の間に一型式入る可能性が強い。杯 B に高さによる分化が認められる石名山窯跡が次にくるであろう。杯 B 蓋は杯 B \mathbb{II} 蓋のみと考えてよいほど他は少ない。最後に小杉流団No.16遺跡 2 号窯 $- \mathbb{I}$ の最終床面遺物がくる。杯 B 蓋には A 型態が認められる。この A 型態は、小杉流団No.16遺跡 1 号窯灰層にも含まれており、両窯の操業終了時はほぼ同時期と考えられる。1 号窯の操業開始時期については不明であるが、考古地磁気測定が相対年代を知る一つの参考になろう。1 号窯の床面最下面での測定値が A D 680 \pm 30年で、石名山窯跡や 2 号窯 $- \mathbb{I}$ ・ \mathbb{II} が A D 720 - 730年に比べて若干古い数値が出ている。

編年的位置については、比較する資料が多くないが、平城宮の調査成果などを参考にすると、平岡窯跡は7世紀の第4四半期から末頃、小杉流団No.16遺跡2号窯-IIを8世紀第1四半期の後半、石名山窯跡を8世紀第2四半期の初め、小杉流団No.16遺跡2号窯-Iの最終床面遺物を8世紀中頃に比定したい。また、図示した小杉流団No.16遺跡1号窯出土遺物の多くは8世紀第2四半期のものと推定される。 (池野)

- 注1 小杉町役場 1958 「2. 金山丘陵の発達」『小杉町史』 P5~6
- 注 2 橋本正春 1983 『N まとめ 瓦』『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地 内遺跡群第 5 次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会 P29
 - 西井龍儀 1983 「IX 御亭角遺跡出土の瓦について」『富山県小杉町・大門 町小杉流通業務団地内遺跡群第5次緊急発堀調査概要』 富山県教育委員会 P37~39
- 注 3 酒井重洋 1985 「Ⅲ京ヶ峰古窯跡」『富山県八尾町長山遺跡・京ヶ峰古窯 跡緊急発堀調査概要』八尾町教育委員会 P19~25
- 注4 池野正男 1982 「No.7 遺跡第3号窯跡」『富山県小杉町・大門町小杉流通 業務団地内遺跡群第3・4次緊急発堀調査概要』富山県 教育委員会 P19
- 注 5 池野正男 1982 「No.7遺跡第1号窯跡」『富山県小杉町・大門町小杉流通 業務団地内遺跡群第3・4次緊急発堀調査概要』富山県 教育委員会 P11
- 注 6 上野 章 1982 「No.7 遺跡第 5 号窯跡」『富山県小杉町・大門町小杉流通 業務団地内遺跡群第 3 · 4 次緊急発掘調査概要』富山県 教育委員会 P29
- 注7 池野正男 1980 「No.16遺跡古墳時代の遺構と遺物①第3号窯跡」『富山県 小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第2次発堀調 奪概要』富山県教育委員会 P9
- 注8 口径では10.6~11cm代、12cm代、13cm代に分かれ、12cm代のものが多い。
- 注 9 橋本 正 1974 『高速自動車国道北陸自動車道関係埋藏文化財緊急発掘 調査報告書 小杉町上野遺跡一記録写真集』富山県教育委 員会 P 3
- 注10 口径では10.6~11cm代、12cm代. 13cm代に分かれ、12cm代のものが多い。
- 注11 池野正男 1982 「No. 6 遺跡」『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内 遺跡群第 3 · 4 次緊急発堀調査概要』富山県教育委員会

P60~66

- 注12 口径では10cm代、11cm代、12cm代に分かれ、11cm代のものが多い。
- 注13 酒井重洋·高慶孝 1984 「中山王窯跡群」『富山県上市町弓庄城跡第 4 次 緊急発掘調査概要』上市教育委員会 P16~18·26~27
- 注14 上野章、池野正男 1982 「(3)窯跡群」『富山県小杉町・大門町小杉流通業 務団地内遺跡群第3・4次緊急発堀調査概要』富山県教 育委員会 PI1~29
- 注15 西 弘海 1978 「V考察2遺物」『飛鳥・藤原宮発堀調査報告』』。奈良国立 文化財研究所 P92-100
 - 稲田孝司 1976 「4 遺物」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 | 』奈良国立文化財 研究所 P27・28・40~42
- 注16 注15の西弘海論文P99の図及び奈良国立文化研究所 1973 『飛鳥・藤原 宮発堀調査概報 3 xP7の図から測ったものである。
- 注17 福島正実氏の御教示による。
- 注18 上記の1、2の文章は池野正男氏との討議をもとにしている。
- 注19 上野 章 1980 「No.16遺跡奈良時代の遺構と遺物①第2号窯—Ⅱ ②第 2号窯—Ⅰ」『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内 遺跡群第2次発堀調査概要』富山県教育委員会 P11・14
- 注20 小笠原好彦・西弘海 1976 「第5章考繁2土器 iii須恵器における器種の 消長と形態の変化」『平城宮発堀調査報告組』奈良国立文 化財研究所 P144
- 注21 山本正敏 1984 「No.16(3)遺構(4)遺物(5)まとめ」『富山県小杉町・大門町小 杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発堀調査概要』富山 県教育委員会 P5・8~20
- 注22 山本正敏氏の教示を得た
- 注23 広岡公夫・青木ますみ他 1982 「W 小杉流通業務団地内遺跡の考古地磁 気測定」「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡 群第 3 ・4 次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会 P98

VI 自然科学的分折

1石名山1、2号窯の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室 広岡公夫、山本恭子

はじめに

土が焼かれると、土中に含まれる鉄酸化物は、地磁気方向の熱残留磁化を獲得し、そのときの地磁気を記録する。 地磁気は時代とともに変化しているので、過去に焼かれて、そのままの状態で保存されている窯跡などの遺構は、そ の窯が使用されていた時代に固有の方向の磁化を現在まで保持しているのである。西南日本各地の、時代のよくわか った遺跡の焼土の測定によって、過去2000年間の地磁気永年変化の様子がわかっているので(Hirooka, 1971;広岡、 1977)、それに照合すると、磁化方向のみから年代を推定できる。これが考古地磁気年代推定の方法である。

しかし、この年代推定法にもまだ幾つかの問題点が残されている。例えば、標準にしている地磁気永年変化曲線が本当に正しいものであるのか、西南日本の永年変化曲線が北陸やその他の地域でも適用できるのか、などである。また、時代が異っても地磁気の方向が同じこともあり、その場合には、考古地磁気学的には2つまたは3つの可能性のある推定年代値を与えることになる。更に、9、10世紀のように地磁気の変化が少ない時代には推定年代の誤差の幅が大きくなり、詳しい年代値を示すことができない。これらの問題点はあるが、通常の考古地磁気年代推定は、標準の永年変化曲線は正しいという前堤で行われている。

試料の採集と測定

今回の石名山古窯跡の試料採集は、1号窯と2号窯で行われた。1号窯からは14個(試料番号 HTY1431~1446)、2号窯から13個(HTY1451~1463)を採集し、総計27個の測定試料を得た。

考古地磁気測定のための試料は、それが窯体内でどのような方位をとっていたかがわかる定方位サンプルでなければならない。試料採集の際の方位測定にはクリノメーターの磁針が用いられるので、遺跡現場の磁北と真北のずれ、即ち、現在の偏角の分だけ測定方位がずれていることになる。そのずれを知るために、1号窯と2号窯の間の地点でトランシットによる太陽の方位観測を行って、遺跡における現在の偏角の値を求めた。その地点の緯度、経度と時刻が与えることによって、その時刻の太陽の方位は計算から求めることができる。この方位は真北を基準にした地理学的な方位である。一方、遺跡現場でトランシットの磁針の北を基準にして測った太陽の方位角は磁北からの角度を与える。したがって、計算値と観測値の差から遺跡現場の現在の偏角が求まる。こうして西偏5.16°の値を得、この値を用いて試料の方位を真北を基準にした方位に補正している。

試料の熱残留磁化方向の測定は高感度の無定位磁力計で行った。この磁力計の心臓部は、同じ形で同じ強さを持つ小さな直方体の磁石(2mmx3mmx4mm)2個を、長さ約5cmの細い石英管の上下の両端に反平行(平行でかつNS両極が逆むき)にして固定した磁石系で、非常に細い石英糸で吊るしてある。磁石1個を糸に吊るせば、磁気コンパスの針のN極が北を指すのと同じように、回転してN極が北に向く。しかし、反平行に2個の磁石をつないである無定位磁力計では、上の磁石と下の磁石が回転しようとする方向は互いに逆になって、磁石系を回転させようとする地磁気の偶力は相殺されて磁石系は回転しない。地磁気を打ち消したのと同じ状態なのである。このような状態の磁石系の下に測定試料を近づけると、試料の持つ磁化は弱いながらも、この磁石系に影響を与える。しかも、その影響の強さは距離の3乗に比例するので、下の磁石には大きいが、上の磁石にはほとんど効かない。この偶力の差のために、それまでの釣り合いが破れて磁石系は回転する。この回転角を、レーザー光源を用いた光てこによって増幅してみることができるようになっている。このようにして、地磁気よりもずっと弱い焼土試料の磁化の測定が可能となるのである。

実際の測定では、試料を磁石系の直下に置き、鉛直軸のまわりに45°ずつ回転する。試料を置きかえて、方位の測

定を行った石膏平面に対して、垂直または平行で互いに直交する3軸に廻すので、これらの軸に垂直な平面内の磁化成分の方向と強度が測定される。この3平面内の磁化成分から三次元的な磁化の方向と強さを計算し、焼土が遺構の中にあった方位にもどし、土が焼かれたときの熱残留磁化の方向を求める。

熱残留磁化の測定結果

1号窯、2号窯から得た個々の試料の磁化測定結果は、第1、2表に示されている。1号窯の試料番号HTY-1434と2号窯のHTY-1451の磁化方向は、ともに同じ窯跡の他のものと非常に離れた方向に磁化していることがわかる。これは磁化獲得の後で何らかの理由で焼土が動いたか、天井や窯壁の焼土が床に落ち込んだか、あるいはその部分だけ温度が上がらず充分な熱残留磁化を獲得していなかったか、などが原因でこのようになったと考えられ、正確な過去の地磁気の方向を示しているとは思われない。それ故、HTY-1434と1451の測定値は、1号窯、2号窯の平均磁化方向を計算する際に省いた。表中に*印がついているのが、これら平均磁化方向の統計計算から除外された試料であることを示している。

第3表にはフィシャー統計法(Fisher, 1953)による平均磁化方向、95パーセントの信頼角(α 95)、精度パラメータ(K)が示されている。 α 95は小さい程測定誤差の小さいことを意味しており、Kは大きい値を示す程その遺構の磁化方向のまとまりの良いことを表す。通常の良く焼かれた窯跡では α 95は $1\sim3$ 度、Kは数百の値となる。今回の測定結果をみると、2号窯の磁化方向のまとまりはあまり良くないことが α 95の値によってわかる。

考古地磁気推定年代

西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線に今回の測定給果を記入したのが第1図である。曲線上の二重丸が100年毎の、一重丸がその間の50年毎の地磁気の方向を表している。黒丸が考古地磁気測定結果を示しており、それを囲む円はフィシャーの信頼角(α ₅₅)の範囲を示す。

考古地磁気推定年代は黒丸に最も近い永年変化曲線の部分の年代によって与えられる。 α ssの円内に含まれる永年変化曲線部分の長さが推定年代の年代幅を与える。

今回の測定結果を地磁気永年変化曲線に記入した第1図から得られる考古地磁気推定年代は

1 号窯

A. D. 725±25年

2号窯

A. D. 640±30年

となる。

引用文献

R. A. Fisher (1953) Disparsion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.

K. Hirooka (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207.

広岡公夫(1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol. 15, 200-203.

第1表 石名山1号窯の磁化測定結果

試料番号	偏角(°E)	伏角(°)	磁化強度 (×10 ⁻⁴ emu/gr)
HTY-1431	-13.03	59.98	3.13
1432	-8.58	55.29	7.44
1433	-6.04	56.78	7.83
* 1434	53.00	65.47	1.13
1435	-8.43	52.39	20.7
1437	-19.58	62.35	1.52
1438	-10.69	51.84	5.86
1439	-4.67	53.26	14.2
1440	-10.76	54.80	18.8
1441	-4.06	49.92	23.6
1442	-11.92	55.90	7.83
1444	-5.70	51.97	10.9
1445	-1.97	54.77	29.7
1446	-9.85	53.52	6.81

*:平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの

第3表 石名山古窯の考古地磁気測定結果

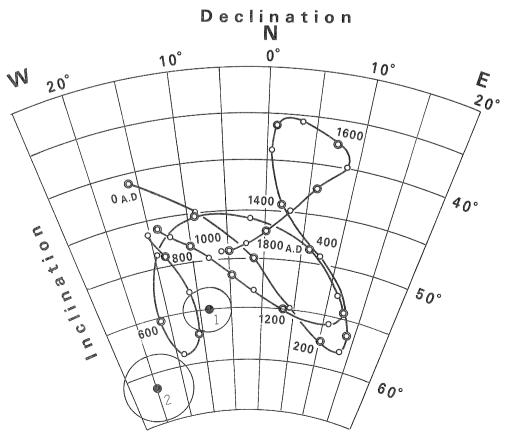
窯 名	N	平均偏角(°E)	平均伏角(゜)	α ⁹⁵ (°)	K
1 号窯	13	-8.61	54.90	2.17	362.9
2 号窯	11	-19.95	61.51	3.21	202.1

N:試料個数、α:フィシャーの信頼角、K:フィシャーの精度パラメータ

第2表 石名山2号窯の磁化測定結果

試料番号	偏角(°E)	伏角(°)	磁化強度 (×10 ⁻⁴ emu/gr)
*HTY-1451	-31.74	44.33	2.81
1452	-24.41	62.01	0.652
1453	-19.80	63.97	1.17
1454	-7.70	56.97	4.46
1455	-21.40	62.74	1.18
1456	-11.22	61.90	2.75
1457	-18.77	63.24	2.47
1458	-21.92	65.97	1.34
1460	-20.46	62.01	4.77
1461	-7.49	54.60	1.97
1462	-36.36	57.69	0.911
1463	-32.93	62.16	1.64

*:平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの



第1図 石名山古窯1号、2号の考古地磁気測定結果と西南日本の地磁気永年変化 1:1号窯、2:2号窯

2 富山県大門町「石名山窯跡の西区の穴」の¹⁴C年代測定

木立 雅郎

≪方法≫

出土した木炭は、ベンゼン液体シンチレーション法によって測定した。 M C年代測定法には、この他にアセチレン(2 H $_{2}$)・ガス法や加速器法などがあるが、その精度にはほとんど差がない。ベンゼン液体シンチレーション法は、試料をベンゼン(2 C $_{6}$ H $_{6}$)まで合成しなければならないため、他の方法以上に多くの時間と労力をかけなければならないが、繰り返し測定できるという利点がある。今回の試料もその利点を生かして3回測定し、その平均値を求めた(1回につき1000分間測定)。

試料の前処理は、NaOH 5 %溶液・HCl 5 %溶液で各 3 時間煮沸したのち、蒸留水で煮沸洗浄して行なった。なお、溶液は 1 時間ごとにさまして交換した。

≪測定値≫

K L - 6 1 4 石名山窯跡の西地区の穴下層出土木炭

 $1600 \pm 110B.P.$ (AD 350) $(1650 \pm 110B.P.$ (AD 300))

※半減期は5568年、〔〕内は5730年。半減期は "C年代測定法の創始者であるリビーの求めた5568年が国際的なとりきめとされてきたが、最近では5730年がもっとも確からしいと考えられている。

≪¹⁴C年代と考古年代の差について≫

上記の "C年代は、7世紀初めとする考古年代とは140~410年くい違う。明らかに "C年代は古すぎるように感じられる。ただし、"C年代測定の誤差は時として数100年に及ぶ場合があるから、今回の試料のみで判断するのは危険である。そこで、他のいくつかの試料と比較する必要がでてくるが、その結果、北陸各地の須恵器窯で同様の傾向が認められた。 また、富山県内の奈良・平安時代の炭焼窯でも同様の傾向が認められる。 これらの測定は、学習院大学、金沢大学、九州大学の 3 ヶ所で行なわれていたものだが、3 ヶ所とも同様の傾向を示している。 「C年代の誤差を無視すれば、北陸の 7 ~9世紀の須恵器窯・炭焼窯の 「C年代は、考古年代より300~800年古くなっている。それに対して、近畿地方では150年程度古くなる傾向はあるものの、北陸に比べればはるかに近い値を示している。 現在のところ、北陸と近畿以外の地域で対比していないが、 「C年代が地域的なまとまりと特徴をもつことは明らかである。この他にも、アイダホ火山灰の「C年代が西日本と東日本で大きくくい違うことが指摘されているが、原因は明らかではない。

今まで **C年代に対する充分な批判的検討はなされておらず、考古学徒は時として「オール・オア・ナッシング」と言う自分勝手な解釈に落ちいったり、理解できないままに無視したりする。何のために測定を依頼したのか理解できない報告書 - 総括の後に測定結果だけを掲載するものなどはその典型例である - はザラである。測定をする側にも問題があり、両者は試料や測定結果についてもっと討論する必要がある。その場合、地理、地学などより多くの学問分野同志がお互いの学問領域に踏み込むだけの努力と勇気がなければならない。ここで指摘した問題はそうした中ではじめて解決され、かつ、学際的な発展をもたらすだろう。 (860108)

追記:測定は阪上正信教授の御好意と協力により、金沢大学附属低レベル放射能実験施設において、木立が行なった。

- (1)『中国考古学中碳十四年代数据集 1965-1981』中国社会科学院考古研究所編著、文物出版社出版、1983。原理・方法・問題も適切にまとめられている。『C年代測定法に対する態度は色々な意味で日本とは大きく異なる。
- (2)『辰口町湯屋古窯跡』辰口町教育委員会、1985。

『金沢大学理学部附属低レベル放射能実験施設研究概要・年次報告 1984.4~1985.3』低レベル放射能実験施設、1985。

(3)関清「製鉄用炭窯とその意義」『大境』第9号、1985。 P54・55の「表2県内炭窯一覧表」に、考古推定年代・熱残留磁気測定値・^MC 測定値を併記。前2者が比較的近いのに対し、^MC年代は明らかに古い。 (4)注(2)と同じ。

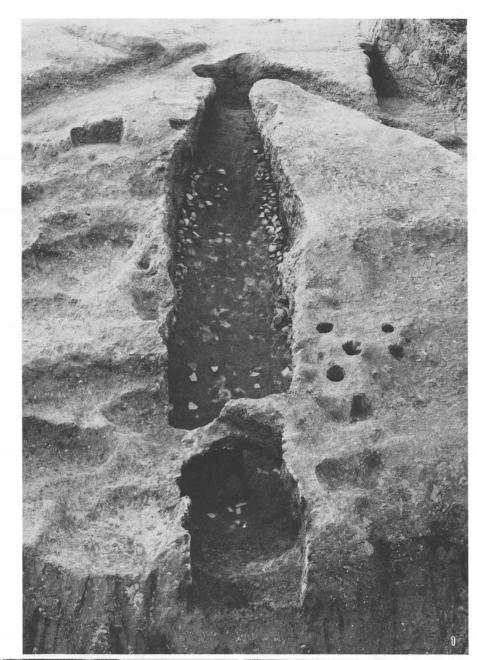




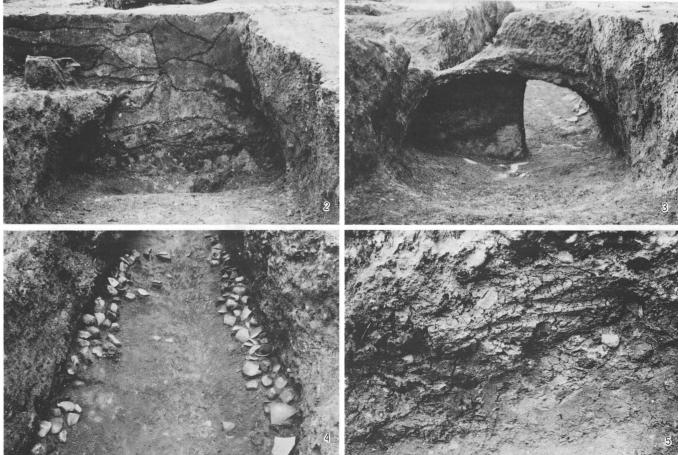
図版 2 遺跡全景

遠景





- 全景
 焚口の土層
 焚口の天井部遺存
 窯体内の遺物出土 状況
 側壁の貼壁

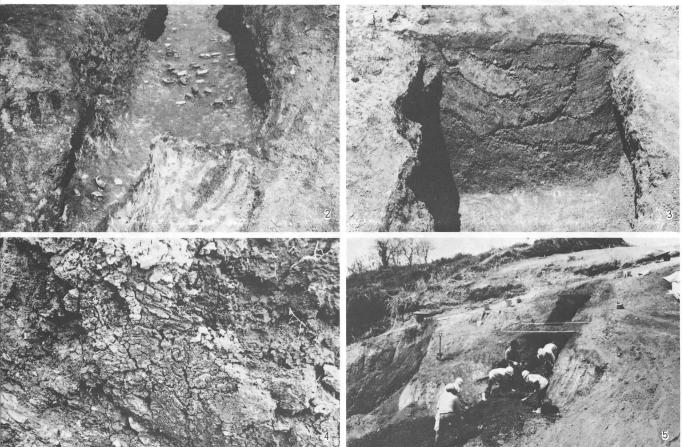




図版 4 1 号窯

- 1. 全景 2. 窯体内の遺物 出土状況 3. 窯体内の土層 4. 側壁の貼壁

- 5. 発掘作業風景





1.2~4号穴



状況 3.3号穴 遺物出土 状況



土器一括 出土状況 5. 1号穴 遺物出土 状況

4. 4号穴

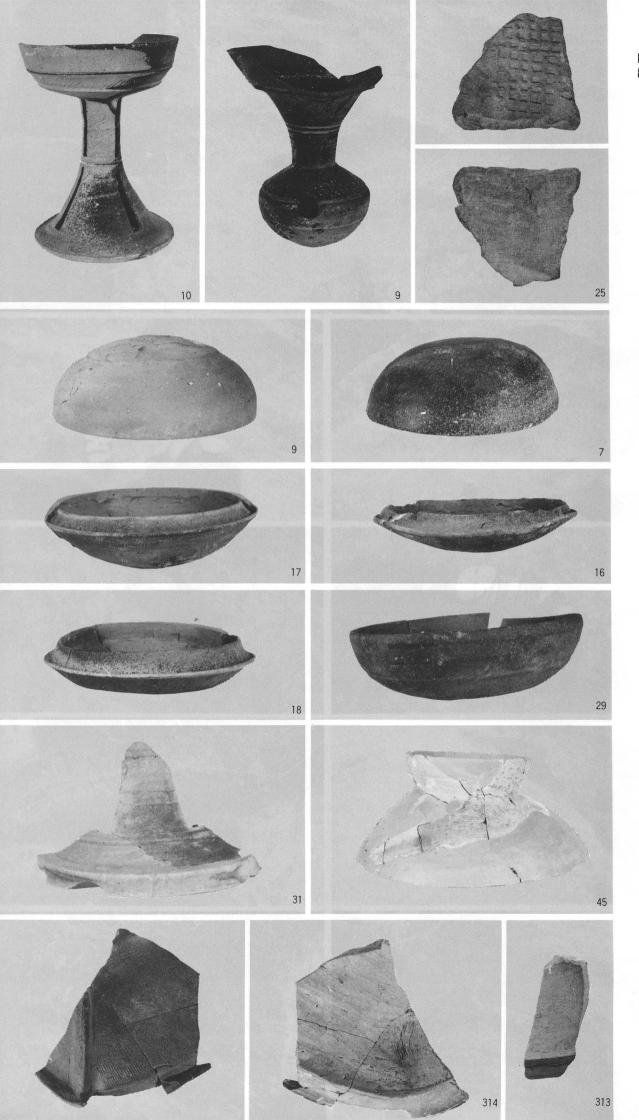


6.8号穴の 土層 7.11号穴の 土層





8.10号穴 の土層 9.西地区 の穴

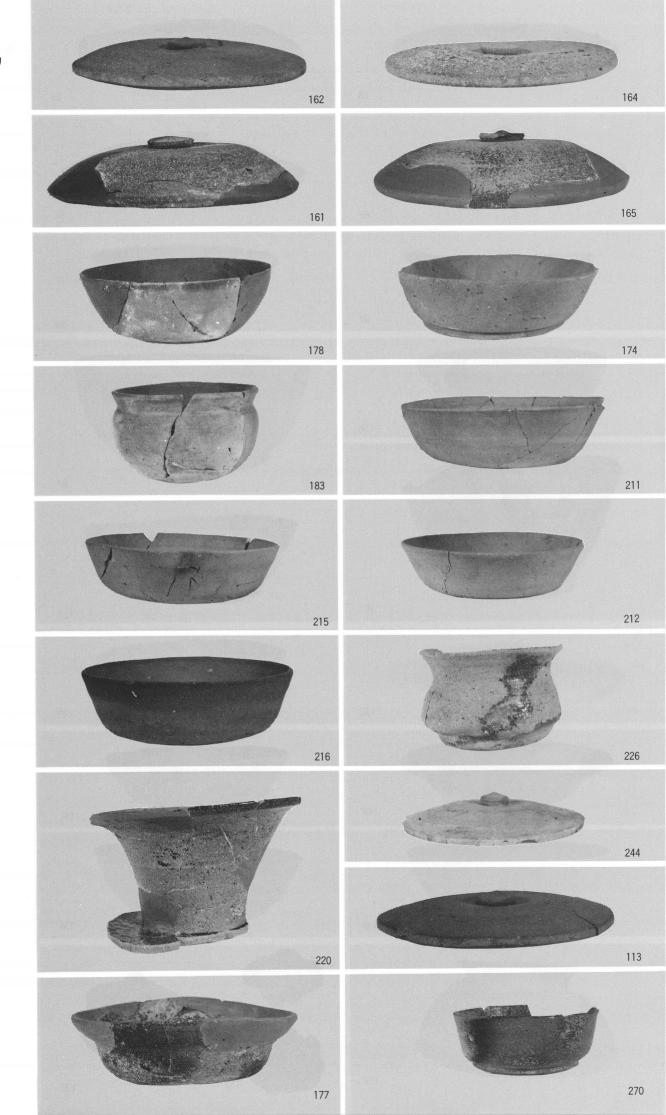


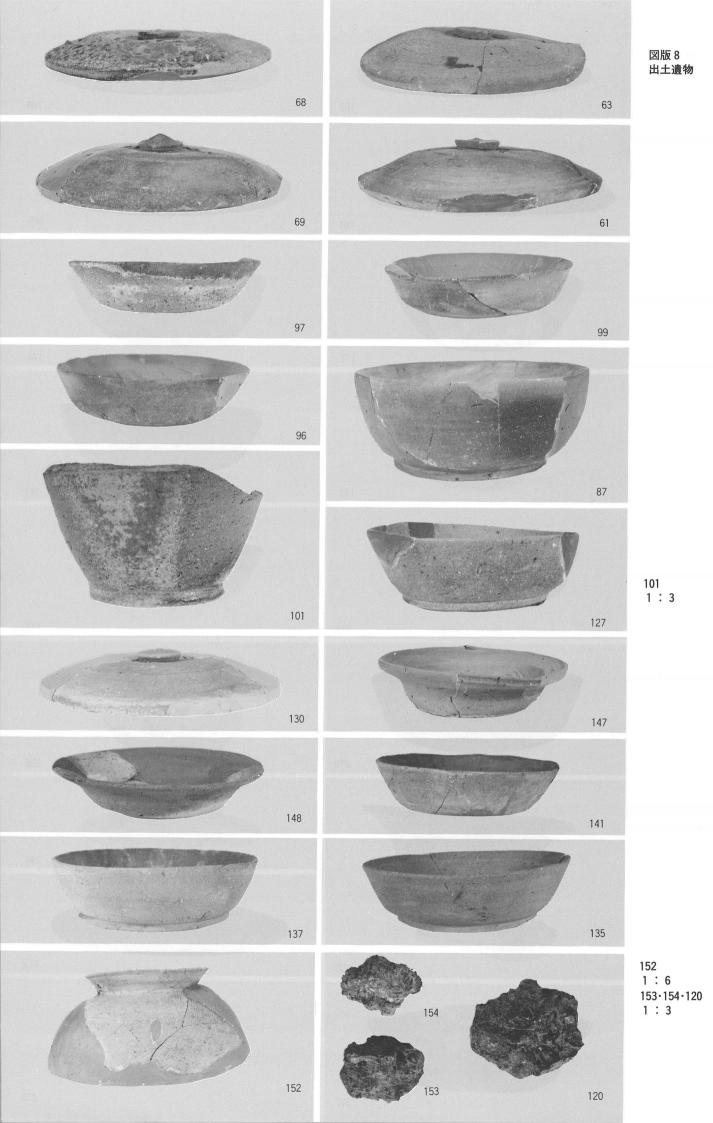
図版 6 出土遺物

10·9·25 旧南郷中学校 所蔵

25 1 : 3

45 1 : 6





石名山窯跡発掘調査報告

発行日 昭和61年3月31日

編集 富山県埋蔵文化財センター

発行 大門町教育委員会

印刷 ヨシダ印刷株式会社

